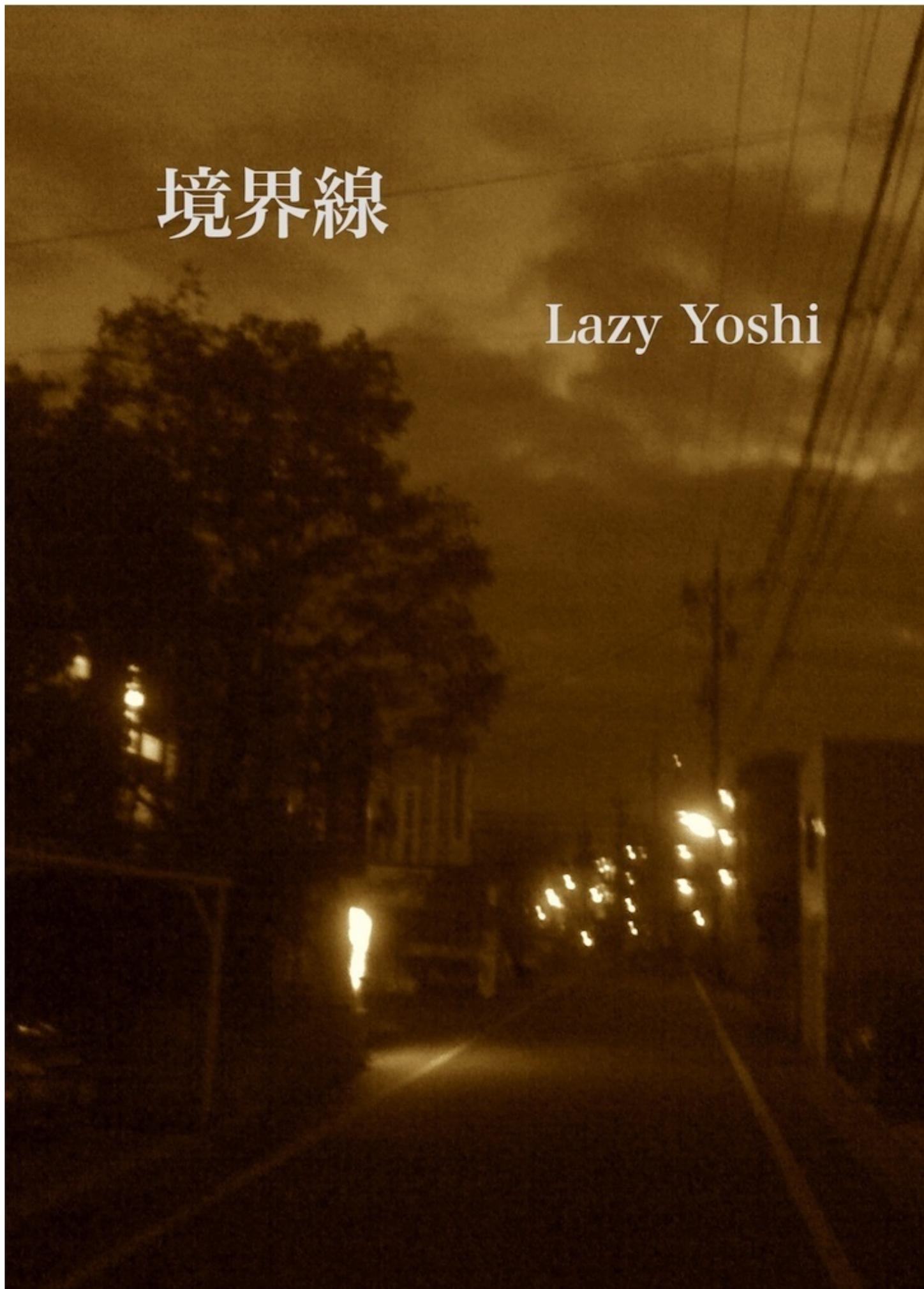


境界線

Lazy Yoshi



新聞配達始まる

朝、4時30分。スターターをキック。今朝も、原チャリのエンジンは快調だ。いつもの様に、前の籠と後ろの荷台に、朝刊を積み込み、配達に向う。4時35分。始めの一軒へ到着。朝刊と経済誌のセットをポストに投函。4時40分、次の家で、犬に吠えられる。これが、今の私の一日の始まりだ。これから、約1時間の配達が続く。もう、眠さには慣れてしまった。未だに、慣れる事の出来ないのは、雨の日の配達だ。カッパの蒸し暑さに辟易する。

お気に入りだったHONDA Jokerを手放し、原チャリには、もう乗る事も無いと思っていた。今は、毎日、HONDA Super Cubに股がる生活となった。不景気の波で、今までの仕事が激減した為、新聞配達を始めたのだった。

食卓の上に放置されていた夕刊配達の募集のチラシが切っ掛けだった。深く考えもせず、電話をし、まだ募集中なのかを確認する。「履歴書を持って夕方に面接に来て下さい。」、との返事。私は、PCに保存してある履歴書を印刷した。エンジニアの経歴が書かれているその履歴書は、新聞配達員の履歴書としては、不釣り合いの様な気もしたが、それが私の履歴なのだ。

スーツで行くべきなのか迷ったが、大袈裟な気がする。ポロシャツ姿に、履歴書を封筒に入れて、事務所に向かう。歩いて一分は、通勤時間として、理想的だと思った。社長さんと面接。仕事の内容や条件を聞き、直ぐに、面接は終了した。可能ならば、明日から、来て下さいとの事だった。呆気なく仕事が決まった事が、意外だった。この面接の前に、何度か技術系の仕事に応募したのだが、不採用が続いていたのだ。今までの経歴とは無縁の仕事には、あっさり合格した事が、不思議だったのだ。今までの経歴等、役に立たない事に、少し不満だった。それでも、ようやく仕事が決まった事で、安堵した。

義母の異変

まだ東京の住人だった頃の或る日、義母から不思議な電話があった。それが、名古屋への1ターンを決意する始まりとなるとは、その時には、予想出来ないでいた。その電話は、「炊飯器の使い方が分からないの。」と言う物だった。その時の私は、ただ寂しいからそんな電話をしてくるのだと思った。義父が亡くなってから、一人暮らしの義母だった。しかし、その電話を皮切りに、「テレビが映らないの?」「洗濯機が壊れたから、電気屋さんに来てもらったの。でも、壊れてなかったの。」など、今まで出来た事が、突然出来なくなる様になって行った。不謹慎だが他人事なら面白い話ではあるが、いざ自分のみに降り掛かると、笑い事ではいられない。

認知症という人が、私の家系には、存在しなかった。私には、そんな義母からの電話が、信じられないでいた。長年使っていた炊飯器、テレビ、洗濯機が、ある日突然使えなくなる。そんな事が、俄には、信じられないのだ。妻は言った。「認知症よ。オバアちゃんもそうだったから・・・」彼女の家系は、認知症だったのだ。だから、認知症に免疫がある様だ。私には、幸いか不幸か、その免疫が無い。

義母の症状は、完全な認知症ではなく、いわゆるマダラ状態であった。ある時は、普通であり、ある時は、異常であった。私は、その事を受け止める事が出来ないでいた。そして、当たり所の無い不満の様な物に対峙していた。それが、自分の親であったなら、私は、不満を打ちまけていたであろう。しかし、血の繋がらない義母に当たる事は、出来ない。その分を、妻に、遠慮勝ちではあっても、不満を漏らさずには、いられなかった。妻も私も気を使いながら、義母の状態を話す事が続き、だんだんと、二人の普段の会話からの笑いが消えた行った。

配達初日

夕刊配達の初日を向かえた。事務所のドアを開けると、社長さんから従業員の方へ簡単な紹介があり、それが終わると、新品のヘルメット、カッパが渡された。7月1日、まだ梅雨は明けていなかった。意気込んで来たものの、「今日は、取り敢えず、やる事を見て頂いて、後ろをついて来て下さい。」との事だった。久しぶりに、カブに股がり、シフトの位置を確認する。慎重に発進するが、エンストした。「直ぐに慣れますよ！」と後ろから、店長が声を掛けてくれた。店長は、実務を仕切っているらしかった。事務所の前を、2、3周すると、なんとなく感じは掴めて来たものの、意識しないとギアを変えられない。こんな調子で、道を覚えられるのだろうか不安になる。

そんな中に、夕刊を積んだ軽トラックがやって来た。他の皆は、いつもの様に仕事をこなしている。何も分からない私だけが、独りポツンと蚊帳の外だ。こんな思いは、初めて会社に勤めて以来の事だった。初日とは言え、戦力ではない事が、情けなかった。

兎も角、仕事を覚える為に、皆の動きに注視する。今日は、見る事だけに集中して、疑問点は後で確認する様にしよう。そう思い始めていた。皆は、手際よく、新聞を扱い、数を確認し、バッグに詰め込んで、速やかに配達に出発した。私は、社長の「では行きますか。」の声で、初めての配達となった。

荷物の無い空のバイクで、後を追うだけの事なのだが、道順を知らない上に、運転も覚束ないのだから、大変だった。ましてや、細い路地にはいると、その場所が、何処であるかさえ分からない状態だ。付いて行くだけで精一杯のまま、短い様な長かった様な初めての配達は無事終了した。

家の近所を回った筈なのに、私は、道順を殆ど覚える事が出来なかった。そんな心配を他所に、「お疲れ様でした。明日もお願いします。」の声がかかった。「お疲れ様でした・・・」元気の無い私を気遣う様に、「大丈夫です。一つ一つ出来る様になります。今日は、運転に気を取られてましたね。」全てお見通しだった。私の気持ちが見透かされている事が、救いだ。「お先に失礼します。」初日を終え、トボトボと帰路につく。質問する余裕等、微塵も無かった。

見えない恐怖

明け方電話が鳴った。義母からだと思直感した。妻の興奮気味な対応が聞こえる。「分かった。兎も角、始発の新幹線で行くから。」彼女は、そう言って受話器を置いた。「ごめんね。」と切り出された。君が悪い訳ではないだろうと思う。でも、それは、気を使っての事だ。それは、分かっているのだが、理由の無い不快感が滲み出ていたのかもしれない。「躓いて、ストーブに頭をぶつけて、血だらけみたい。」悲しそうな声で、状況が伝えられた。「分かった。直ぐに行ってきた。」「ありがとう。そうする。」

東京と豊田。その距離は、埋められない。新幹線で、3時間。それでも、やはり遠いのだ。電話だけでは、状況が見えない。その事が、二人を不安にするのだ。血が流れている事は、分かっても、傷の深さ、状況が分からないのだ。その場に、駆け付けて、その場を見ない限り、適切な判断が出来ず、不安を消す事は出来ない。「じゃあ、行ってくるね。」妻は、豊田に向かった。

義母は、老人の独り暮らし。近くに、身内もない。妻は、一人っ子。やはり、私達が、手を貸すしか、手立ては無いのだ。独りになった私は、そう実感した。でも、仕事は？。正社員ではないとはいえ、簡単に「名古屋に行きます。」とは、切り出せない。自分の実家は？。私は、信用は無いが、長男なのだ。義母をサポートしないと出来ない事は、理解したものの、それから波及する事への対応の困難さが次々と迫って来るのだ。

一人っ子。一人っ子……。何度も、妻が、一人っ子である事が浮かび、その度に、その現実を理解しようとした。頭では理解出来る。しかし……。納得出来たのか分からなかった。

仕事の方は、何とかなるだろう、と思う。私の仕事の大部分は、メールでもこなせる。実家は、どうしよう。私には、弟と妹がいる。両親も健在だ。どうにか、するしかない。そうは、思うものの、気が重かった。

電話が鳴った。「傷は、浅かったから、大丈夫。でも、部屋は血だらけだったの。……。」ホッとした様子ではあったが、いつになく小さな声だった。私は、心を決した。

何で今頃

「何で今頃から、夕刊配達を始めたの？一番辛い時期なのに！」。事務所のドアを開けると、先輩の女性が声を掛けて来てくれた。「何ですか？」と聞き返すと、「梅雨だし、これから暑くなるから。これ以上脱ぐことが出来ないから、夏が一番厳しい時期なんです。」と教えてくれた。深く考えて始めた訳ではない事を実感したが、今の私には、他の選択肢は無く、見つかった仕事に早く慣れる事が、当面の目標だ。

今日もまた、社長さんの後を追う。昨日、通ったばかりの道なのだが、記憶が曖昧だった。この辺りの道は、細い上に曲がりくねっているのだ。大きな道から細い道に入ると、普段は通る事の無い場所にいる。そうすると、現在地が分からなくなり、見慣れた道に戻ると、ようやく、位置関係が朧げに分かるという感じだった。昔なら、一発で覚えられた、と思う。50過ぎた今、物覚えが悪くなった事を認めざるを得なくなった。妻と二人きりの生活をしている時は、気にならない、否、気づかない様にしていたが、第三者との新しい仕事の中では、それを強く実感するのだった。

運転は、昨日よりは、スムーズになった。それでも、Uターンする時には、遅れ勝ちだ。何度も、切り返して、やっと、目的の方向に変わるのだった。その度に、遅れまいと頑張るのだが、切り返しは、簡単には決まらず、汗がボタボタと落ちるばかりであった。一番辛い時期。その言葉を体感し始めたようだ。

今日もまた、長い様な短い様な時間が過ぎ、配達は終了した。こんな事で、独りで、配れる様になるのだろうか？そんな心配もよそに、先の先輩から、麦茶が渡された。一気に飲み干す。汗をかいたばかりの体に、しみ込んでいった。一言二言、他愛の無い会話を交わす。久しぶりに、妻以外の人と、会話した事に気付く。家に籠って仕事している私は、会話の無い生活を繰り返していたのだった。言葉を交わした事が、新鮮に思えるのだ。

「お疲れ様でした。お先に失礼します。」事務所を後にする。夕刊配達も悪い物ではない、と思うのだった。

父への報告

「いずれ名古屋に引っ越そう。今すぐは無理だけど、計画を立ててみて。」心に決めた事を、妻に伝えた。「ありがとう。考えてみる。でも、仕事大丈夫？」「仕事は、何とかかなると思う。今も毎日行かなくてもいい様にしてもらっているし。」私の仕事は、システムの管理とコンサルティングであり、必要がない時には、出社しないでも給料に影響しない様な契約を結ばせてもらっていた。会社まで、自転車で15分。トラブルの時には、いつでも駆け付けられると言う距離が、その都合の良い契約を可能にしていたのだろう。

「そうだね。お義父さんには・・・」「お父さんには、俺から言うよ。お義母さんの側に、誰もいないのだから、仕方がない。」と言ったものの気は重かった。私は、30過ぎに、勘当された経歴を持つ、不肖の長男なのだ。そして勘当中に、妻と同棲し、結婚を機に自然と勘当が解かれた。その事実が、私には負い目だった。それでも、報告しない事には、進められない。正月家族が揃った席で言ってしまえ、と覚悟した。

「お父さん、いずれ二人で、名古屋に行って、お義母さんを介護する事にします。」神妙に、なるべく刺激しない様に報告した。「仕方がないな。分かった。」短い了承の返事があった。父の思いは複雑だったと思うが、一人っ子と言う事を理解しての事だと思う。「すいません。有難うございます。」妻は、父に謝罪し感謝した。

ホッとした。これで、前に進める。私の計画は、既に決定していた。先ず、妻だけが名古屋で生活する、準備が整った時点で、私も名古屋で生活する。「名古屋で住む計画を立ててね。」妻に、依頼した。「えっ、私が・・・」「仕方がないじゃないか。俺は、名古屋の土地勘が無いんだから。」「分かった。でも、相談に乗ってね。」「うん。最後は、判断するから。」名古屋への引っ越しが、進み始めたのだった。

「こんにちは！」事務所のドアを開けると、「今日は、順路帳を見ながら付いて来て下さい。」と新たな課題が与えられた。順路帳には、配達先への道順が、記号で表されている。記号の説明を受ける。記号の意味は、即座に理解出来たのだが、記号を見るだけでは、残念ながら、実際の道が頭に浮かんでこない。やはり、慣れるしかなさそうだと感じた。順路帳は、次の家への相対的な質関係しか表現されていない。絶対的な位置関係を把握していない私には、一度、その位置を捉えられなくなると、次への道順が分からなくなるであろう事を理解した。

そんな不安を抱えながら、3日目の配達が始まった。順路帳を確認しながら、社長のバイクを追った。順路帳の指示を正確に掴んでいる時は、問題無いのだが、右左を勘違いしたりすると、直ぐに、迷子状態になる。その度に、今ここですと、修正されながら、後を追った。ページがまたがる時が、また、一苦労だ。ページを捲ると言う作業で、他の作業が中断してしまうのだ。その度に、社長のバイクは、先に行き、慌てて後を追うと言う事の繰り返しで、その日の配達は終了した。

「時間のある時に、一人で、順路帳を見ながら、回ってみて下さい。」と社長さんから、声が掛かった。私も自分のペースで、回る事が、効果的だ。「そうします。何時頃が好いですか？」「配達の前が、好いと思います。」「分かりました。」私は、明日は、そうしようと思った。

自分のペースで、回れるなら、今よりも余裕を持って覚えられる。一刻も早く自分で配達出来る様になりたい。いつまでも、戦力にならない自分の姿が、嫌で堪らない。妻は、「仕方ないよ。」と言う。私も、そうは思う。しかし、そんな現実の自分に堪えられないのだった。

汗でビッシヨリになったポロシャツを脱ぎ捨て、シャワーを浴びる。明日は頑張ろう、と口にした。仕事が終わった事の証しとして、ビールを飲む。乾いた体のせい、体の疲れのためか、1杯のビールで、快い酩酊感がやって来るのだった。

父の異変

名古屋行きの決定をしてから、両親、妻と私で池袋に行った。東京から移る前に親孝行のつもりだったのかもしれない。サンシャインや東急ハンズをぶらつき、昼食。その時に、異変が起こった。

食事中に、父が咽せ始め、頼んだ鉄火丼が、喉を通らない。「大丈夫。ちょっと咽せただけだ。気にしないで食べてて。」ハンカチで口元を押さえ、父は、先に店を後にした。おかしいな、と感じた。食事中に、父は、席を外す様な人ではなかった。しかし、普段からの体調の異常は、母からも聞いていなかった。「大丈夫かな？」妻は、心配そうだ。「咽せただけだろう。」と、私はその場を繕った。その時の母の顔を、私は思い出せない。今思えば、以前から父の異常に気付いていたのだろう。

父は、店の前で、待っていた。顔色は、冴えないが、動けない状態ではなかった。「もう、大丈夫。少し詰まっただけだ。」「気をつけて下さいね。」妻は、気遣いの声をかけた。「もう帰ろう。」私は、皆を促し帰路についた。

数日後、母から電話があった。「お父さん、良くないみたいなの。明日、病院に家族で来て下さい。と言われたの。」「分かった。」時間と場所を確認して、電話を切った。良くないな。病院に、行く事の無い父が病院に行ったのだ。私は、冷静に、病院で医師から伝えられるであろう状況を想像していた。

父母、弟妹、私、5人は、病院の会議室に案内された。医師と形式的な挨拶を交わした後、医師から父の病状が説明された。単刀直入に、「末期の食道癌」であることが、伝えられた。父は、現実を受け入れようとし、一方母は、ただ涙ぐんでいた。私は、やはりと思った。食道の入口に、大きな腫瘍が有り、食べ物が喉を通らない状況だった。治療法は、「手術と放射線治療」であり、最悪の場合は、「声が出なくなる事も有ります。」との事だった。「質問は？」と医師から。全員は、無言で、現実を受け入れる事に始終しているようだった。

空回り

「こんにちは。練習に来ました。」と挨拶をする。「空回り、気をつけて行って来て下さい。」との声と共に、順路帳が手渡された。空回り、成る程と思った。一人で回ると言うのは、気楽な反面、不安も一緒だった。出だしの家は、覚えている。順路帳があれば何とかなるさと、自分を奮い立たせながら、バイクをキックした。取り敢えず一件目の家まで、バイクを駆った。

いざ目的の場所の付近まで来ると、何となく間違っている様な気がする。その様な感じもするのだが、どうもあやふやだ。取り敢えず、順路帳に、「？」の印を付けて、次に進む。出発点に自信が持てないのだから、次の家も「？」、その次の家も「？」、最後までたどり着きそうにないのだった。不安の深まる中、早々に引き返す勇氣も無く、次の目的地に向かう。次は、大丈夫だった。理髪店という間違えの様な無い目的地だったからだ。「何してるの？」と、理髪店のオーナーから声が掛かった。「夕刊配達の実習です。」「そうか、社長に付いて回ってたもんね。気を付けてね！」新人が回ってる事は、目立つらしい。「有り難う御座います。」怪しまれずにすんだと、ホッとしながら、次へと向かう。確実な場所が、見つかると、次の場所へも、自信を持って向かえるのだった。

2、3カ所までは、順調だったのだが、細い路地に入ると、また、不安に襲われる。未だに、私は、この地では、異邦人である事を実感する。仕方が無く、それらしき目的地を確認し、先へと進む。今日は、霧田気だけでも、掴んでおけば本番の時に、確認しながら、覚える事が出来るはずだ。

進んで行く中に、どうしても分からない目的地に遭遇してしまった。昨日までの記憶を辿ってみても、それらしき風景は浮かんで来るのだが、新聞を入れたという場所が、見つからないのだった。道半ばにも届かず、4分の1位の所で挫折し、引き返すしか術が無かった。

力なく、事務所のドアを開けると、「どうでした？」と社長から声が掛けられた。状況を報告し、分からなかった場所を確認する。「順路帳に、ポストの色や形も書いてあるので、それからも判断出来ます。」と、アドバイスされた。見直すと、順路帳には、道順だけで無く、家の特徴も的確に表現されている事に気付いたのだった。余裕が無いから、情報を見落としていたのだ。反省と共に、初めての空回りは終了した。

お見舞い

お義母さんの認知症から動き始めた名古屋への引っ越しが、父の入院で思わぬ方向へ転換して行った。弟と妹がいるとは言え、末期癌の父を残して、計画を進める事は、妻も私も出来ない事だった。しかし、お義母さんの事を放置して置く訳にも行かない状況に進んでいた。真夜中の電話が、彼女の叔母さんの所へも掛かり出し、「姉さんが、少しおかしい。」と報告されていたからだった。

そんな状況が頭を悩ませていたが、妻と二人で、父のお見舞いへと向かった。元気そうには見えないが、気持ちは確りしていた事が、二人を安心させた。ベッドには、治療方針が書かれた書類と、父のメモが置かれていた。「すまないね。」と父は気を使った。「何か欲しいものある？」「フリカケを買って来てくれないか。無理してでも食べないと・・・。」「分かった。」食べる事が辛い事が分かった。妻は、いつもの様に、明るく振る舞い、「頑張ってくださいね。」と父を励ました。手術は、まだ、少し先だった。「頑張るよ。」弱々しく答えながらも、父は微笑んでいた様な気がする。「また、来るよ。」「仕事も有るのだから、そんなに来なくていいよ。」父は言った。

帰り道、二人は、確りした父の姿で安堵していた。「今度来る時は、お義父さんの好きなカステラを買ってこようね。」妻が、呟いた。「うん。」私は、そう答えたものの、父の好物など知らなかった。「本も持って行こう。梅庵がいい。」私は、自分の思いつく限りの案を出した。二人は、今度のお見舞いの計画を立てながら、新宿から、実家ある早稲田まで、歩いて行った。お互いの親が病気。二人きりで、ゆっくり、その現実を確認し合う時間が流れて行った。

実家に着いた。「どうだった。」母が尋ねた。「明日、洗濯物取に来てって。」いつもと同じ様な夕食を摂り、帰路についた。「大丈夫かな？」「大丈夫だよ。」妻の強さが、私には辛く感じられるのだった。

15時30分、再び事務所のドアを開ける。空回りの成果が試される時間がやって来た。順路帳を持ち、社長さんの後を追いかける。少しは、成果があったのか、昨日までとは違い、目的地に行く前に、道が分かる様になっていた。前もって心の準備出来る様になると、今までは、気が付かない事に、気付き始める。社長さんのバイクを止める場所。切り返し易い場所を選んで止めている。新聞の折り方。ポストの形状に合わせて、折り方を変えている。昨日までは、追う事だけで、精一杯だったが、見えなかった事柄に気が回る様になって来ていたのだった。

「ここからは、先に走ってみて下さい。」そんな私の変化を察してか、走る順番が、途中から交代した。「はい。」と答え、順路帳を確認しながら、次の場所へ向かう。スムーズとは言えないが、目的の場所へ移動する事が出来る様になって来た。しかし、時に、目的の場所を見逃し、ピーとクラクションで、間違いを正されるのだった。

それでも、薄らと、自信が湧いて来た。やっけて行けるかなと言う気持ちが、やっけて行けるに変化した。「では、新聞を入れてみて下さい。」社長さんから、新たな課題が与えられた。入れる位、簡単さ、と思った。意に反して、簡単な作業ではなかった。何気なくたたまれていた新聞が、私には、上手くたためない。新聞が、手に馴染んでいないのだ。単純な作業ではあるが、私は、社長さんの何倍もの時間が、必要だった。「何気なくやっていますが、慣れないと上手く扱えないんですよ。」予想通りの結果だったのか、社長さんが、微笑みながら言った。私は照れくさそうに、「そうですね。」と答える。

何事もやってみないと分からない。当然の事ではあるが、毎日そんな思いをしている。若い頃ならば、日々勉強です、と素直に受け入れられるのだろう。50過ぎの私には、それを積極的ではなく、受動的にこなそうとしている様だ。知らず知らず新しい事を受け入れる事が、辛くなっている事に気付かされるのだった。

慣れ始めた、長くて短い時間が終わった。「なにか質問はありますか？」社長の声に、「配り忘れた場合は、どんな風に、探せばいいのですか？」心配性の私は、早くも失敗した場合の対応を確認する。「一番確実なのは、回った所を、確認する事です。」私は頷いた。やはりそうか。私にも、それ以外の方法は浮かばない。ならば、確実に配る事を、第一に考えるべきであろう。明日も、空回りしよう。そう思いながら、事務所を後にした。

検査

父の容態は、気にかかるものの義母を放置して置く訳にも行かなかった。取り敢えず、妻を義母の元へ送り検査を受ける手筈にした。検査は、脳のCTと問診だった。CTの結果は、脳の萎縮が見られ、良い状態とは言えないらしいが、問診では、それほど酷い状態でもないらしい。時計の絵を描けば、時計に針と数字が並べられ、それはまだ、時間の概念を失っていない事の証らしい。

それでも、妻からの電話では、精神的に安定していない事が告げられた。その原因は、義母自身が、自分自身の状況を理解出来ない事だった。何故、こんな状態になってしまっているのだろうか？という気持ちと、そんな風になる訳が無いという気持ちの整理がつかないでいる様だ。それはそうだろう、と思う。当事者でない私でさえ、その状態が理解出来ないのだ。私は、未だに、寂しさが、義母の変化の原因だと確信していた。だから、妻が側にいれば、状態は改善すると高をくっていたのだった。

妻は、「やっぱりアルツハイマーが進んでいる。」と言い。「それと付合うには、優しく接して行くしか無い。直る事を望むのではなく、進行が進むのを遅らせるしかないの。」と、私に理解を求めている様だった。でも、私には理解出来ないでいた。病気ならいつか直り、回復する。それが、治療ではないのか？そんな結果の出ない治療法に、納得がいかないのだった。「分かった。頑張ってね。また、連絡して。」私は、気持ちとは裏腹に、表面的には、優しく振る舞おうと努力したつもりだった。「ありがとう。また、電話する。」妻は、私の気持ちを察しているらしく、事務的な答えだった。そんな答え方をさせてしまう私の態度が自分自身が情けない。

寝たっきりの祖母を持つ知り合いは、「だんだんマダラから、本当に分からなくなるの。悲しいけれど、そうなった時に、精神的には安定する・・・。」頭では、分かる。でも・・・。状況が好転する事の無い出来事と、いつまでも付合わなければならない事が、俄には受け入れ難かった。そんな中、父の手術が迫って行った。

眠た気に目を擦りながら、妻が目を覚ました。「散歩に行こう！」私は、嫌がるであろう彼女を誘う。今日は、妻の休日なのだ。「ええ・・・どこに行くの？」明らかに拒否に近い返事だった。「夕刊の順番を確認するんだ。朝なら涼しいよ。」「一人で行けば・・・」と言いたげな彼女。私は、意に介さず、促す。「早く着替えて！」彼女は、モサモサと準備を始めてくれた。仕事の為なら、仕方がないか、と言う風だ。彼女の仕事は、マットを運ぶ事だ。彼女自信も、道を覚える事の苦勞を知っているのだった。

ドアを開け外に出ると、心地よい風が流れている。日差しも、朝の為か、柔らかだ。「ほら、気持ちいいじゃないか。」未だ、眠気の去らない彼女へ声を掛ける。「そうだね。空回りなら、仕方がないか。」自分に言い聞かせている様だ。配達開始地点までは、見慣れた道だ。「ここまでは、簡単なんだ。知った道だから。次からは、通った事のない道だ。」偉そうに、覚えただけの道を説明し、自慢した。「そこの角を左に曲がって、右側の家が、〇〇さんの家。ここは、普通の新聞。」妻には、全く必要の無い情報を吐く。「ふんん・・・。」義理でも相槌を入れてくれる、そんな彼女だ。「次は、〇〇さん。ここは、スポーツ紙も入れないとだめだ。一種類だけなら、簡単だけど、スポーツ、それに経済、三種類だから大変だ。」「そうだね。マットも何種類もあるから、種類を覚えるだけでも大変だったよ。それに、場所毎に、納品物が違うから本当に大変だよ。」どうやら、彼女の仕事の方が、厄介の様だ。そんな苦勞は、もう知ってるのと軽く釘を刺された感じだ。

「ここで、前半の新聞が無くなるんだ。新聞には、宛名が書いていないから、間違うと大変さ。」少しでも、大変なんだと言う事を伝えようと意味の無い努力をしている。「そうだね。大変だね。」妻は、子供の自慢をあしらう様に対応する。悔しい気もするが、配達と言う仕事では、彼女に一日の長がある。それに、付合ってもらっていると言う弱みもある。

「切りが良いから、今日はここまで。」二人の額には、薄らと汗が滲み始めていた。「毎日、続けられなきゃと痩せるよ。」最後に、憎まれ口を叩いて、家に戻った。

「手術は、成功でした。食道の大きな腫瘍を取れたので、食べ物も喉を通る様になります。声帯を取らずにすみました。」と担当医師から報告があった。末期癌である上に、声を失うショックは、想像以上の事であろう。父が声を失わないですんだ事を喜ばずにはいられなかった。父は、ベッドで眠っている。意識が戻る頃に、また来よう。私は、一時会社に戻る事にした。

手術が成功したとは言え、それは、まだ第一段階が、終了しただけであった。その後、レーザーによる治療。その効果が期待出来ないようであれば、再度手術。食べる事を困難にしていた、直接の原因、食道の入り口の腫瘍が無くなっただけなのだ。とは言え、一つ前進した、と実感する事が出来るのだった。

義母の状況は、そんな風の実感する事の出来る変化が期待出来ないでいる。緩やかに、義母自身も、そして周りも、老いて行く事の現実を受け入れる事が、唯一の方法の様だった。「夕方や雨の日は、精神的に不安定になるの。そんな時は、状況を受け入れられないのか、凶暴になる時があるの。」妻からの悲しい報告が、頭の中で蠢き出す。「つかまれた手の跡が、青くアザになってるの。」皮肉な事に、力は衰えていない、あるいは、不安定な心がアレドナリンを増加しているのかも知れない。「辛いだろうけど、頑張ってるね。」そんな言葉を掛ける、それだけが私に出来る事だった。「それに、たまに私が誰だか、分からなくなったり・・・」ドラマで見た様なシーンが、現実には起きているのだ。

終わりが無いであろう義母の状態、いつかは結果の出る父の癌、二つの違いを納得する事が、未だに私には出来ないでいる。きっとそれは、理解するものではなく、受け入れるべき事なのだろう。

「お陰様で、父の手術は、成功しました。でも、これからも、度々ご迷惑をかけると思います・・・」会社の人達に、父の状況を報告した。

いつもの様にバイクをキックした。だが、今日は特別な日だ。初めての一人での配達の日なのだ。空回りと空歩きで、十分に練習を積み、店長の最終判断が出たのだ。いつもよりも念入りに、新聞の数を確認する。配達前に、順路帳を見ながら、怪しげな記憶の場所が無い事を確認した。そして、配達の間まで、何度もシミュレーションを繰り返した。失敗の要素は見つからない。しかし、完全に不安を消す事が出来ない。そんな気持ちを断ち切る様に、順路帳をバイクの前にセットして、アクセルを開けた。一人での配達が始まった。

既に見慣れた道なのだが、今日の風景は、どこか違って見える。間違っている様な気がしてならないのだが、「間違えたら間違えただ。」と腹を括った。新聞をポストに入れる度に、マーカを進め、順調に新聞は減って行く。中間の確認ポイントで、残りの部数を確認すると、失敗は無さそうだ。徐々に、行けそうな気がしてくる反面、ポストに入れてしまった新聞が正しかったのかが、心配で仕方が無いのだった。腹を括ったと言いながらも、完全には居直り切れない自分がいた。

「只今戻りました。」時間がかかったものの、初めての一人での配達を終了した。「お疲れ様。どうでした？」社長さんから声が掛かる。「大丈夫だと思います。」と答えたものの不安な気持ちが去来する。タオルで汗を拭いながら、もう一度、配達の間を辿る。大丈夫、大丈夫、と確固たる根拠は無いものの、自信を持ちたかった。「多分大丈夫ですよ。」社長さんは言った。

「不安な中は、間違えないものです。順路帳が要らなくなり、自信を持ち始めた頃に、不配するんですよ。」と微笑んでいた。そんなものかも知れない。何事も慣れ始めた頃に失敗する。父の「上手切らずに、下手切らず。」という言葉が浮かんだ。まだまだ、失敗するまでの段階ではない事に、僅かに安心したものの、不安は立ち去らなかった。

「お先に失礼します。」いつもの挨拶を残して、事務所を後にする。体はグッタリしていたものの、頭は異常に興奮し、配達した道順が何度も甦って来た。「後は慣れるだけだ。」汗だらけの体をシャワーで流しながら、そう繰り返すのだった。

父を見舞いに行くと、放射線治療が始まっていた。「とにかく声帯を取らないですんだ事で、良かったと思うしかないな。食欲が無いんだ・・・。」微笑もうとしながらも弱々しい父の声だった。パジャマの隙間から、マジックの印が覗いた。私の視線を感じたのか、父は、パジャマのボタンを外し、マジックで付けられた十字の印を曝した。「放射線治療の時のマークなんだ。位置が分かる様にしている。」乱暴なマジックの印が痛々しい。治療と言うものの冷淡さの象徴に感じる。枕元の治療の説明書が差し出され、「読んでおいてくれるか。」と父が言った。「うん。辛いのか?」「まだ、辛くない。食欲が無いけど、食べないとダメだ。」精一杯闘っている、痩せた父が、「向こうに行こう。」と促した。

面談室の大きな窓に、新宿の夕景色が映っていた。「あんまり来なくても良いよ。」「うん。」私は、今までの親不孝を、少しでも返しておきたかった。「お義母さんは、大丈夫なのか?」「命の心配は無いけど、あまり良くないみたい。」「そうか。」二人っきりになると、父も私も話題が見つからない。一通りの状況の確認が終わると、二人とも時間を持て余した。「じゃあまた来る。」そう言って、その場から退散した。

山の手線に揺られながら、マジックの印が、また浮かぶ。肌に直接マジックで書かれた、黒い十字が、何度も浮かんで来るのだった。父の状態ではなく、その事だけが、頭に残っている事が不思議だった。私は、何故あんなに無造作に、体に印を付けられるのかが、気に掛かっていた。

家に帰ると、何枚かのFAXが届いていた。名古屋での住まいの候補だった。土地勘の無い私には、間取りだけが唯一判断出来る材料だ。どれもこれも、違いは無い。FAXから手を話すと、電話が鳴った。「FAX届いてる?」妻からの電話だ。「うん。今見た。でも、良く分からない。」「そうだよ。一応、場所は、豊田と名古屋の中間を搜してる。後、駅からの距離。それと駐車場・・・。」「了解。実際に見てみないと分からないよね。回ったの?」「まだ。候補を取り敢えず知らせたんだ。」暫くの、東京と名古屋の二重生活を考えると、名古屋に出易い事は、重要なポイントだった。「場所は問題無いから、回ってみてくれる?」「明日見に行ってくるね。」名古屋への計画が現実として迫って来た事を感じる。それでも、黒いマジックの印ばかりが、私を支配しているのだった。「また、電話するね。」妻からの電話が切れた。

失敗！

順路帳を確認しながらではあるが、一人で配達する事にも慣れ始めた。順路帳を持って出て行くものの、殆ど見る事もなく、配る事が出来る様になっていた。もう大丈夫だ！と確信し始めた頃に、それが崩れる事件が起きた。

新聞配達は、毎日同じ事の繰り返しなのだが、例外がある。お客さんへの配達の休止が、それだった。配達前に、休みの顧客が無いか確認し、部数を調整して出発する。確認する事は忘れなかったが、私は、大きな勘違いをしたまま、その日の配達に向かった。いつもの様に、新聞を余す事も無く、配達から戻ると、店長から予想外の声が掛かった。「○○ホームから、電話があったよ。休みの分が多かったって。明日から、減らせば良いから。」私は、目の前が暗くなった。勘違いをしていた事に、気が付いたのだ。「すみません。今から行って来ます。」「明日から減らせば良いよ。」と店長。「はい。でも、○○ホームと△△ハウスを勘違いしていました。△△ハウスへ届けて来ます。」そう言うや否や、私は再度バイクを駆った。老人ホームという事で、私は、違う場所を減らし、減らすべき所を減らさなかったのだ。

「電話があって良かったね。」戻って来た私に、店長が笑いながら言った。「はい。届いてないと言う電話の前に分かって助かりました。気を付けます。」私は、自分が粗忽である事を思い知らされ、出来上がりつつあった自信が果無く崩れさって行った。「そんなにガッカリしなくてもいいよ。間違いは誰でもある。・・・」店長の優しい言葉が、なおさら痛かった。

事務所からの帰り道、父の言葉が、甦る。「好い気になっているからだ。」失敗する度に、父から、そんな風に叱責された気がする。言い訳は、許されなかった。その度に、父を憎んだ。叱られた記憶は山ほどあるが、褒められた思い出は、浮かばない。でも、もう父はいない。空しさを感じながら、ドアを開けた。

「ここにしようと思うの・・・」妻から、名古屋の家の最終確認だった。「平針と赤池駅、両方使えるから、名古屋に出るのも、豊田に出るのも便利。両方の駅とも歩いて7、8分。・・・」名古屋と義母の住む豊田の間である事は、必須の条件だった。当面は、東京と名古屋の二重生活であり、週末はどちらかが、移動するつもりだ。「駐車場が無いから、別に借りないとならないけど・・・」「そこに決めよう。駐車場は、近くにあるの?」「マンションの裏に有るって、不動産屋さんが言っていた。親切なんだ。」見知らぬ土地へ移るのだから、不動産屋さんが親切である事は、重要だ。「なら、頼んでおいて。」知った場所なら、あれこれと悩むのだろうが、見知らぬからこそ、簡単に決める事が出来たのだった。

「週末行き来すると、交通費が・・・。新幹線なら往復で2万、一月で10万か。それに、マンションと光熱費・・・」家が決まった事で、かかる費用が現実となった。しかし、それは仕方が無い事だ。「始めは、僕が名古屋に行って、様子を確認。」頭に浮かんだ事を一人呟きながら確認する。「落ち着いて着たら、週末は東京に来て貰う。」勝手に、これからの生活パターンを考え始めた。父の状態を考えると、そうする方が良いと思い、また、私には、もう一つ東京を離れ難い事情があったのだ。

私は、その頃、ある大学に編入し、週末だけの授業があった。「授業の翌週には、インターネットで授業は公開される。暫くは、それで、頑張れば良い。週末は、名古屋に行ける。」考えは、流れ易い方向に流されて行くのだった。「それに、学割がある。」私は、ネットを検索し、高速バスを使えば、交通費を大幅に削減出来る事を、見つけた。暫くの事だ。私は、そう思っていた。

今後の事を決めると、元来お気楽な性格の私には、新たな週末の生活が、楽しいものに思えて来る。それは、いずれ義務感へと変化して行くのだが、その頃の私は、新たに起る事への期待に満ちていた。

今までは、さほど感じなかった暑さが辛くなって来た。夕刊配達に慣れて来た証しだ。ポロシャツ一枚という出立ちではあるが、配達も終える事には、水をかぶった様に濡れていた。風を切る爽快感も、バイクを止めた途端に、灼熱の地獄に変わるのだった。止まった瞬間に滴る汗。それが新聞に落ちない様に、注意する。その事が煩わしい。蝉の声が、煩く響き渡っていた。

東京にいた頃には、蝉の声で夏を感じ、その一生の果無さを思ったのだが、この地では、それは、単なる騒音に等しい。その絶対数が、違うのだ。道路やマンションの通路に、間もなく寿命が尽きるであろう蝉が転がっている。それでも、人の気配を感じると、突然動き出す。始めの内は、驚いていた私も、いつもの光景となって行った。無情さを感じる事も無く、まるで石ころと同様の存在となり、私の心が揺らぐ事も無くなりかけていた。

いつもの様に、木製のポストを開ける。パタン、その音を合図に、無数の蝉が飛び出して行った。不意を突かれ、私は、呆然とした。何が起ったのか、瞬時には理解出来なかったのだ。これ程の数の蝉が、いる事が不思議であり、恐怖だった。私は、ヒッチコックの鳥のシーンを思い浮かべた。この場所だけでも、こんなに蝉がいる。そう考えると、道端で見かける瀕死のそれも不思議ではなく、ほんの一部なのだろう。私の頭の中は、かさついた蝉の死骸の山で一杯になって行った。

「蝉が飛び出して来て、驚きました。」配達を終わり、同僚の女性に、その驚きを報告した。彼女は、冷たい麦茶を差し出しながら、「沢山いるからね。」と冷静に答えた。これがこの地の夏なのだ。私は、まだ、この土地に馴染んでいないのだ。逃れ様の無い疎外感の様なものを感じるのだった。

名古屋の妻から電話があった。「大分落ち着いてきたかな。・・・」あまり話した気では無い様子だ。「夕方とか大丈夫なの?」「・・・。時々、精神的に不安定になって、攻撃的になる事がある・・・。」やはり心配しないでいいという状態ではないらしい。「トースターの中に、ビニールの燃えかすがあった。レンジと間違えて使ったみたい・・・。」「そう。」家の中の状態が、過去の義母の状況を語っているらしい。やはり、あまり多くを話したく無さそうだった。それは、私に対する気遣いである事は、理解出来るのだが、状況を話すべきだ、否、話して欲しいと思った。しかし、彼女の口は重かった。「頑張ってるね。」何度、この言葉を口にしたいのだろう。それだけが、私に出来る唯一の事である事が、悲しかった。

放射線治療を続けている父は、「食欲が無い。でも、食べないとな。」と言うだけで、不満や痛みを、嘆く事は無かった。看護師さんを困らせる事も無く、模範的な患者だった。唯一の例外は、母であり、我が儘の捌け口は彼女に向かった事は、仕方の無い事であったと思う。そういう意味では、私は、距離を置いて父と付合う事が出来、妻は、密接に義母と対峙しなければならないと言う差が生まれていた。

父は、頑固で偏屈だった。義母は、明るく社交的であった。そんな対照的な二人が、今また、対照的な子供との関係を作っている事が、悩ましく思える。認知症という病気である事は、やっと理解し始めて来た様に思うのだが、認知症の義母を受け止める事が出来ないままだった。

そんな私を気遣い、多くを話せない妻。そして、義母と直接付合わないに行けないのは妻なのだ。彼女は、二人の間で悩んでいたに違いないのだった。しかし、名古屋との二重生活を選んだのは、状況を進展させる為だった筈だ。そう考えると、今の現状が不満で仕方が無い。父の様態も急変する事は無いであろう。私は、週末に名古屋に向かう事にしたのだった。

夕刊配達も日常となって行った。季節は、初冬に移り変わり始めた頃、ポストに一枚の求人チラシが、ねじ込まれていた。ゴミ箱に放り込む前に、目を遣ると、朝刊配達の募集であった。朝刊も募集しているんだ、と思ったが、朝の寒さを考えると積極的に始めようという気には、ならないのだった。しかし、東京での仕事は、一向に増える気配は無い。どうにかしないと、と徒にネットで求人を検索している最中だった。「朝刊配達の募集があるんだ。」妻に声をかけてみた。「大丈夫？大変だよ。」予想通り、朝が辛い妻は、やんわりと否定的な答えを返して来た。「そうだな。他を捜すか。」それ程乗り気では無い私も、即座に同意するのだった。

いつも通りの夕刊配達を終えると、店長が声をかけて来た。「朝刊配達どうかな？」少しだけ迷い、「やりたいです。」と答えた。自分でも意外だった。「朝4時からだけど。」「その時間は、いつも目が覚めていますから大丈夫です。」それは、店長への答えというよりも、自分自身への確認だった。「良かった。身近にいて。社長には言っておきます。」店長は、ホッとしたようだった。見知らぬ人よりは、夕刊配達の実績がある方が安心だったのだろう。

やると言ってしまったものの、やはり不安だった。「十分引き継ぎの時間を取りますから、安心して下さい。引き継ぎまで、1ヶ月以上ありますから。」社長さんから体制が伝えられた。なら大丈夫か。そう言い聞かせながら、事務所を後にした。

「朝刊始める事にした。」「え！」妻は驚きの声を上げた。「どうしたの急に！」「店長から、どうですかって、言われたんだ。」「そう。まあ、夕刊配達を始めてから、寝込まなくなったし、少し丈夫になったのかもね。」夕刊配達を始める前の私は、頻繁に微熱を出し寝込む事が屢々だったのだ。「朝起きるのは大丈夫だからやってみる。せっかく誘われたんだし。」「ありがとう。」妻は、お礼を言った。私は、「うん。頑張る。」予想外に、朝刊配達が決まったのだった。

東京駅で、高速バスのチケットを買う。意に反して、何の問題も無く学割が使えた。学生と言っても、年齢と風体を疑われると思っていたのだが、写真付きの学生証の威力は絶大だった。出発までの時間、おむすびと雑誌を購入し、長時間の移動の準備をした。気分は、旅行なのだった。出発の時間と到着の時間を妻にメールをし、準備は全て完了した。

浮かれ気分も出発して暫くの間だけだった。東名高速の景色にも飽き、退屈で苦痛な時間が過ぎるのを待つばかりだった。費用の問題はクリア出来るかもしれないが、この苦痛から逃れる術は思い浮かばない。寝るしかないか、と思うのだが、昼間の移動では、眠る事さえ義務だった。これが、毎週続くのか。初めての移動からウンザリし始めていた。何度も雑誌を読み返す中に、バスは漸く、最後の休憩地の浜名湖に着いた。

「今、浜名湖。」妻へ携帯した。「もう少しだね。」「うん。予定通りに着く。」「じゃあ。待ってるから。」連絡だけで話は終了した。もう直ぐ名古屋だ。1週間ぐらい妻と離れていただけだったが、久しぶりに会う気がする。目的は、義母の様態の確認なのだが、妻に会う事が、目的の様にも思う。

バスは、名古屋に到着し、地下鉄、名鉄、さらにバスを乗り継ぎ、義母の住む豊田に到着した。もう何度も訪れ見慣れた場所だ。しかし、今日は、どこか違う感じがする。今までと違う義母との対面をしなければならないという思いが、そうさせていたのかもしれない。

「こんにちは。」私は、ドアを開けた。「お帰り。」妻の声と笑顔があった。「こんにちは。」そして、いつもの義母の声が聞こえた。普通にしか見えない義母が、そこにいた。取り敢えず、荷物を置き一息着く。「えらかったね。」「うん。退屈すぎて疲れた。」他愛も無い会話をしながら、様子を伺うが、以前と変わら時間が流れて行った。

「買い物に行こう。」暫くすると妻が切り出した。「うん。」私も同意した。状況を話したいと言う事らしい。妻と二人で、近所のショッピと呼ばれているショッピングセンタへと歩き出した。

「おはようございます。」事務所のドアを開けた。朝刊配達の日だ。まだ、顔見知りもない為か、挨拶も疎らだった。「引き継ぎの人はもう少ししたら着ますから、少し待って下さい。」店長が、そう伝えた。狭い事務所の中は、朝刊にチラシを差し込む人や配達の準備をする人で、ごった返している。私は、邪魔にならない様に、自分の居場所を捜した。ここでも新参者なのだった。人生も半ばを過ぎた頃に、そんな立場になろうとは思っていなかった。しかし、今は、夕刊でも朝刊でも、一番の新人なのだった。虐められる訳ではないが、何となく肩身の狭い立場である事を改めて感じるのだった。

「おはようございます。〇〇です。よろしくお願いします。」引き継ぎをしてくれる先輩が出社して来た。「よろしくお願いします。」私は、初対面の挨拶を交わし終わると、店長から声が掛かった。「今日は、取り敢えず手順を見て、後を付いて行って下さい。新聞は積まなくていいです。」「いつもより、ゆっくり走ってね。」と、店長は先輩に念を押した。それなら、安心して付いて行けると思った。

朝刊の束を持つ。想像以上に重い事に驚く。夕刊とは比べ物にならない位、朝刊は、厚く重いものだった。それを先輩のバイクの荷台に置き、ゴムバンドで縛った。夕刊とは何もかも違う手順に驚きながら、忘れない様に確認した。「それでは、行きますか。」と先輩が促した。バイクをキックするが、エンジンは始動してはくれなかった。初冬の朝の寒さで、夕方の様にはエンジンはかかってくれないのだった。2、3度キックを繰り返し、漸くエンジンが弱々しい音を立て始めた。「少し暖まるまで待ちましょう。」既に準備は完了状態の先輩から声が掛かる。「はい。」寒さも忘れ、私は、汗をかいていた。「では、行きますか。」声と共に、先輩は飛び出して行った。

慌てて後を追う。夜明け前の道は、真っ暗だった。闇の中に光る、先輩のテールランプを追い、ウインカーに注意を払う。いつもよりは、ゆっくり走ってくれているのだろうが、追いつくのが、やっとだ。暫く走り、マンションの前で、バイクは、停車した。「ここが、始まりです。」新聞の束を抱えて、エントランスに向かう。集合ポストの決まった位置に、新聞を差し込む。こうして、朝刊配達の日が始まったのだった。

何故かこの地方では、ショッピングセンターをショッピングと言うのだ。聞き慣れぬ中は、違和感の有った響きも、今では自然になっていた。二人で歩きながら、義母の状態を確認した。「どうなの、義母さんの具合。普通に見えるけど?」「今は、回路が繋がっている感じ。偶に断線するの。」「ふうん。」私には、良く分からない。「昔の記憶が急に甦って来るの。お母ちゃんが、昔、祖母ちゃんにした、些細も無い仕打ちを思い出して、物凄く後悔するの。祖母ちゃんもそんな事気にしていなかった様な事なんだけど、未だに記憶から消えないみたい。」「そうなんだ。」私は、一向に良く分からないのだった。「満月の日は、何故か不安定になるみたい。少し凶暴になるんだ・・・」と言いながら、妻は、悲しそうに右手を差し出した。握り締められた手の跡が、薄くアザになっていた。私は、その生々しい現実を理解した。「そうか。」それしか、言葉が見つからなかった。

歩きながら、少しずつ、状況を確認し、理解し始めた。遠くは無いショッピングへの道のりが長く感じられた。普通に見える義母の状況は、私の想像を遥かに超え深刻だった。問題は、有効な治療が無い事であり、終わりの見えない現状が続く事だ。一人っ子。その重荷を、他人に分散する事を考えない訳では無いが、彼女は、遠回しに拒否していた。「出来るだけ、介護したい。」それはそうだろう。しかし、一人だけで、それを続ける事は不可能だと私は思う。私は、妻の立場は理解出来るが、彼女の役割を肩代わりする事は、出来ない事を知っていた。

「晩ご飯何にする?」考えても解決方法は見つからない。空腹と言う目の前の問題に、二人の会話は変り始めた。「外食が多いから、何でも好いけど・・・」と言いながらも、食いしん坊の私は、食材を搜した。「お義母さんの好きな助六を買おう。」「そうだね。それと・・・」二人は、出来合いの総菜を適当に買い始めた。何の事は無い、東京での食生活と変わらない。それでも、久しぶりの妻との会話に心は、穏やかになっていた。

冬の雨

日曜日の朝は、雨だった。まだ、先輩の後を追う事で精一杯の状況での雨は、辛い。雨が、容赦なく私の眼鏡を曇らせるのだ。その日の私の仕事は、前日までよりも少し多くなっていた。朝刊の半分を、私のバイクにも積む事が許されたのだった。「夕刊とは、全然違うので気を付けて下さい。」店長からの注意を、バイクを走らせた途端に理解した。荷台に積んだ朝刊の束は重く、まるで、初めて自転車の二人乗りをした時の感覚が戻って来た。ふらふらとして、不安定この上無い。信号に捕まり、走り出す度に、その不安定な状態を感じるのだった。

「雨は嫌ですね。」先輩から声が掛かる。「そうですね。」私は、そう答え、首に巻いたタオルで、汗を拭った。冬の寒さも、配り出すと、体が熱くなる。雨の日には、カッパを身に纏ってる分、なおさらだった。愚痴を言っても新聞は減らない。二人は、いつもの道順をまた走り出す。少しは、暗闇にも慣れ、道順も頭に入り出していた。「大分、道順は覚えたみたいですね。」先輩が、進歩に気付いてくれた。「はい。」と答えた瞬間、事は起った。

ガッシャン、という音と共に、ビニールのパックに詰められた新聞が散乱した。頭の中が、真っ白になり、私は呆然とした。そんな私を尻目に、先輩は、暗闇の中、新聞を手際よく回収していた。「すみません。」漸く、事態に気づき、私もそれに加わった。「始めの内は、良く遣るんですよ。新聞は大丈夫で良かった。」濡れた新聞を拭きながら、先輩は私を気遣ってくれた。既に、ずぶ濡れのカッパの中の体が、増々、厚くなるのを感じていた。処理が終わると、先輩は、新聞の状態を再度確認し、何事も無かった様に、バイクを走らせて行った。私も我に返り、慌てて後を追いつつ始めた。

「お疲れ様でした。」いつもよりも長い配達を追えた。「今度は、注意します。」「雨が降っていると、注意力が散漫になるから、気を付けましょう。」「はい。」私は、今度は失敗しないぞ、と自分に言い聞かせ、事務所を後にした。仕事が増えたその日に、失敗した自分を情けなく感じた。冬の雨は、依然、しとしとと降り続けていた。

夜行バス

名古屋の状況は、理解出来た。目的は、達成した。しかし、問題の解決方法は思いつかなかった。そんな事を考えている中に、東京に戻る時間がやって来た。昼間の高速バスでの移動の退屈さを思うと、もう一度その苦痛を味わう気分にはならない。寝る事が時間を潰す最良の方法ならば夜行バスで帰る方が、良さそうに思えた。「今夜、夜行バスで帰る。」妻にその旨を伝えた。「そう。バスの場所分かる?」「名古屋駅に行けば分かると思う。前、名古屋空港に行った時の場所だよな?」「そう。大丈夫だね。」まるで、初めての一人旅へ向かう小学生を送り出す母親のようだった。

「じゃあ、行くね。」「バス停まで送って行く。」妻と二人で、近くのバス停まで歩いた。妻と二人で、そのバス停からバスに乗り、それを義母が見送る事が常だった。今日は、私は、そこから一人で、名古屋に向かう。寂しいというよりも、いつもと違うと言う事が、気を重くしていた。いつの間にか、小雨が降り始めていた。「じゃやね。」「気を付けてね。」バスは、定刻に到着し、一人バスに乗り込んだ。

一人になると、この週末の事が、一気に押し寄せて来た。それを一つ一つ整理しながら、名古屋までの時間を過ごす。煩わしいと思っていた名古屋までの道のりも、その日は、短く感じられた。

いつか乗ったバス停は、簡単に見つかり、夜行バスに乗り込んだ。バスは、出発し、東名高速に入る。窓に、映る自分の顔と外の雨跡が重なっている。私は、それを見つめながら、一人である事を実感するのだった。また、暫く一人。そう思う。でも……。一緒に居たからと言って、何が違うのだろうか?とも思う。彼女と一緒に居なくても、生活には、何の問題も起こらないのだ。居ても居なくても、私は、自分のペースで仕事をし、お酒を飲みに行き、眠るのだ。何の不自由もないのだ。そうは思うものの、何か違う。しかし、その違いが何でなるか出来ないでいた。

バスは雨の中を東京へ向かう。いつの間にか、私は眠りにつき、気が付いた時は、早朝の新宿に着いていた。

朝刊配達の間も掴み始め、空回りで道順を覚える事にした。真っ暗な道を、付いて回るよりも、自分のペースで、明るい道を回る方が、気楽であり効率的であった。少し時間はかかるが、自分の足でゆっくりと、ポストの位置を確認しながら、空回りを始めた。暗闇の中で見ている風景と、明るい中で見るその違いに驚く。こんな所だったんだ、とその歴然とした違いに驚くのがあった。ポストの場所や障害物を確認するには、昼間の方が数段楽なのだが、一つだけ難点がある事を知った。それは、朝は寝ている犬だ。闇の中ではおとなしい犬も、昼間は獰猛に吠え、私を威嚇するのだ。存在に気付いた今、恐怖心を私に植え付けたのがあった。そんな問題も生まれはしたが、順調に道順とポストの位置が頭の中に焼き付き始めた。

空回りの成果が出始めた矢先、私の体に異変が起こった。夜中に突如、腰の裏側に激痛が走ったのがあった。それは、今まで感じた事の無い痛みだった。トイレに行ったり、眠ればどうにかなると、寝ようと試みるのだが、何をしても効果はなく、その痛みは消える事が無かった。「痛い。」我慢しきれずに、そう妻に、訴えた。いつに無い悲痛な表情に、妻は、「救急車を呼ぼう。」と言った。躊躇はしたものの、痛みは激しさを増すだけだった。「電話してくれる。」私は、そう懇願するしかなかった。

救急車の音が聞こえ始めた。私は、準備をし家の前で、その到着を待つ。いつの間にか、サイレンは止み、救急車は到着した。音が消えたのは、呼んだ人への配慮のようだった。症状を報告し、掛り付けの病院へ向かう事が決定した。私は、意識は確りしているものの、痛みは極限に達し、一人で乗り込む事さえ出来ない。ストレッチャーに、寝かされ、救急車へ載せられた。

病院に着くなり、エコーでの診察。尿道結石であろう旨が伝えられた。「尿検査とレントゲンの検査をして下さい。」医師から次の検査を伝えられた。血尿。私は、自分の尿の異状に驚いた。チョコレートの様な色だった。そして、レントゲン。検査の後に医師から、尿路結石である事が、断定された。「明日、専門医の診断を受けて下さい。予約は入れておきます。」痛み止めの座薬が渡され、我慢出来ない時には、それを使う様に言い渡され、家に戻った。

夜はもう直ぐ明ける頃だった。痛みは、一瞬どこかへ遠のくののだが、直ぐに舞い戻って来る。その周期は、段々短くなって来る。私は、生まれて始めて、座薬を入れた。何故か屈辱的な気がした。「悪いけど、新聞店に、状況を電話してくれる。」妻に依頼する。もう直ぐ、朝刊配達の間だ。「分かった。」妻は、電話を取る。「お大事にして。仕事は、心配ないって。」「ありがとう。」ホッとした私は、座薬も効き始めたのか、眠りに落ちて行った。

夜な夜な

父の状況は、急激に悪化する事も無く、医師から提示された治療が粛々と進んでいた。それは、最悪の方向へ向かう時間が止まっているだけで、完全に回復する事はないであろう事は、父も家族も察知していた。私は、忙しく無い時は、父の顔を伺いに病院へ行き、仕事のある時は、契約先へ向かう。そんな妻の居ない生活は、どこか退屈であり、日が暮れると、夜な夜な、飲み歩く生活が日常化し始めていた。

妻の居ない3LDKの家は、広すぎる。独りぼっちで、家で食事をする事は、家族の中で育った私には、堪え難いものでしかなかった。相手が居る時は、居酒屋へ。相手が見つからない時でも、どこかで夜更けまで飲み明かした。一人で居るよりは、たとえ他愛の無い会話であっても、人と居る事が救いだっただ。いつの間にやら、客引きのお兄さんと顔見知りになり、世間話をかわす様になっていた。

連夜の深酒は、私の健康を蝕み始め、無気力にさせて行った。このままの生活を続けて良い筈も無い。目が覚めるとそう思うのだが、夕方になる頃には、飲む相手を捜し同じ生活を繰り返していた。妻が居ない、否、彼女との会話の無い生活を紛らわす術が、飲む事以外、見つからないのだった。

離れて暮らし始めて、彼女の存在の重要な事に気が付いた。人見知りの激しい激しい私は、他人と話す時に、大量の酒とタバコが必要だった。その二つ無しには、場が持たないのだ。妻だけが、その二つを必要としない相手だった。それにも関わらず、一人で居る事が出来ない。酒に溺れて行く事は、必然なのかも知れない。

それでも、この生活を続ける訳には、行かない。連日のきつい宿酔いが、体の限界を告げていた。他にやるべき事を見つけようと、考えざるを得ない状況になっていた。自分の為すべき事は、何なのだろう。自問自答しても答えは見つからない。虚無。為すべき事の無い自分が、空しい。カーテン越しの日差しの中、激しい吐き気が、また襲って来た。

一眠りすると、予約した時間だった。痛みは、大分弱くなっていたが、完全には無くなっている、いない。柔らかくなった痛みを感じながら病院へ向かう。造影剤を入れてのレントゲン撮影が終わり、結果の説明が伝えられた。「右側の腎臓から、尿道に尿が流れて行かないので、尿道に石が落ちています。それが、痛みと、血尿の原因ですね。」「そうですか。治療方法は？」私は、当然の質問をした。「痛みを和らげる薬を出しますが、効かないかも知れません。痛みがある時には、鎮痛剤を使って下さい。直ぐに効くのは、座薬ですから、それにしましょう。」「はい。」痛みを抑える効果的な方法は無く、痛みを感じた時には、座薬しか無いらしい。現代医学といえども、そんな原始的な方法しか無い事に、失望した。「それと、座薬は、連続して使う時には、6時間以上空けて下さい。」6時間は、薬が効いていると言う事なのだろうか？、と不安になる。この痛みは、想像を絶したものなのだった。「レントゲンを見る限り、左の腎臓にも石があります。」「え！」私は、痛みの要因が、左右にある事を知った。「両方とも小さいので、砕く事も、出来ません。まあ、自然に出ると思います。水分を多めに摂って下さい。」「左が痛み出す事も、あるんですか？」「急に落ちると、痛むかも知れませんね。」医師は、一般症例を続けた。「いつ痛むかは、分かりません。痛みも無く、石が出る事もあります。」運を天に任せるしかない事を知った。1ヶ月後の診察を予約して、病院を後にした。

激しい痛みが、治まっている中に、新聞店への現状報告書を書き上げ、FAXする。送った後から、また激しい痛みに襲われた。座薬を持って、トイレへ向かう。昨夜、既に経験した為か、苦もなく、処置が終わった。直ぐに効くとは言え、瞬間的には、効き始めてはくれない。痛みに堪えるには、うずくまり、唸る様な声を出すしか無いのだ。そして、薬の効き始めるのを待つ。暫くすると、徐々に痛みは遠ざかり、再度眠りについた。

電話の音で、目が覚めた。社長さんからのお見舞いの電話であった。妻が、現状を説明する前に、「暫く、休んで下さい。」との事だった。朝刊配達は、未だ、引き継ぎ期間だった事が、幸いし影響は無い。夕刊配達は、そうはいかない。その事が、気になっていた私は、ホッとした。夕刊配達を始めてから、始めての休みだった。こんな事で、休んでしまう事が、悲しい。「しかたないよ。」妻は、私の気持ちを察し、そう慰めた。「分かってる。」不機嫌そうに私は答えた。優しくされると、素直になれない自分が許せない。しかし、態度は、いつも反対だった。

痛みは、6時間を待たずに、訪れた。そして、その時間が過ぎるのを待って、薬を入れる。それを繰り返し、石が体から出るのを待つのがだった。

その朝も軽い吐き気があった。食欲が起らない。冷蔵庫のペットボトルの烏龍茶だけを飲み干した。一人だけの部屋は、段々と雑然とし始めていた。リビングには、仕事の為のコンピュータ関連の本が、山積みになっていた。その中に、一冊の書道雑誌が混じっている事に気が付く。徒にページを捲っていると、不意に、個展を開こうと思い始めた。

小学生の事から始めた書道を、私は続けていたのだ。しかし、父からは一度も褒められた事はなかった。唯一の例外と思われるのは、私が書道展で特選になった時であった。それでも、声を出して褒められる事は無く、只、小さく私の名前の載った朝刊を仏壇に上げただけであった。「新聞に名前が載ったのは、お前だけだからな。」一言そう伝えられた。それが、父の出来る精一杯の表現だったのかも知れない。

父の励みになるかどうかは分からないが、私は、個展をする事を心に決めた。二日酔いの勢いが、私を後押ししたのかも知れない。そうと決まれば、愚図愚図している訳には行かない。インターネットを検索し、借りられそうな美術館を見つけた。

父へのお見舞いがてら、報告をする。「今度、個展を開く事にしたんだ。」「そうか。」淡々とした父の反応だった。「何とか、頑張っって食べないとな。」少しは、励みになったらしい事が嬉しかった。伝えるべき事を伝えると、もう会話の糸口は見つからない。いつもの様に、大事には至っていない事を確認し、帰路についた。

私の頭の中は、既に個展の構想一色になっていた。私の立場で、書の個展と言うのも、烏滸がましい気もする。そんな風に思っている時、妙案が浮かんだ。以前から練習していたコンピュータを使った書道を中心にすれば良い。マウスを使った書道であれば、第一人者ではないかも知れないが、開拓者ではあろうと、勝手に理由をこじつけた。題して「マウスで書道展」。キャッチも出来上がった。そうと決まれば、事を運ばない手はない。幸いな事に当たりを付けておいた美術館は、インターネット美術館があり、常時、作品を公募していた。

展示されるかは分からないが、手持ちの作品数点を、応募する。数日すると、展示の通知が届いた。これで、個展への足掛かりは出来た、と確信したのだった。

痛みの周期は、段々と長くなり始めていた。しかし、一度その痛みに襲われると、座薬無しでは、堪えられるものではなく、その度に、座薬を入れた。もう、何の抵抗も無く、座薬を持ってトイレへ向かう事が習慣になっていた。痛みから逃れる術は、それしか無い。薬物依存。それは、些細な事から始まり、唯一無二の方法へ、進化してしまう事なのかも知れない。抵抗も無く座薬を入れる自分に気付くと、恐ろしさを感じた。

新聞配達、そして東京の契約先とのWEB会議もキャンセルした。仕事を休んでいる事が、更なる罪悪感を生んだ。痛みがあるとは言え、仕事をさぼって無為な生活をしている。何かしたい。「買い物に行こうか？」非番の妻に声を掛けた。「大丈夫なの？」「今は、痛みが無いし、近場なら大丈夫。」私は、断言した。

近隣のショッピングセンターへ向かい、買い物を済ませた。順調だった。買い物を車へ積み込み、帰路へ着く。車が動き出して、暫くすると、激しい痛みがやって来た。「……。」私は、唸り始め、「痛い……。」と声を漏らした。「大丈夫？もう少しだから、頑張っ！」妻は、心配そうに声を掛け、平静に運転を続ける。「ウウ……。」低く声を漏らし、痛みを紛らわそうと、もんどりうつのだが、何の効果もない。唸り続けて家の前に着く迄の時間を待った。

「少し早かったね。」トイレから出た私に、妻が言った。「うん。」頷くしか無い。「もう暫くは、休んでね。」「うん。」悪戯した子供が、諭されている様だ。今は、反論の余地がない。私が、妻の立場なら、攻撃を続けたらろう。しかし、大人の彼女は、私の逆切れを予知してか、本来の優しさか、「もう少しだからね。」と労りの声を掛けて終わった。

安静の賜物か、2、3日すると、我慢出来ない痛みからは、解放され、座薬との縁も切れた。時折、疼く様な痛みを感じるが、生活には支障のない迄に回復したのだった。「週明けから、夕刊配達は再開させて頂きたいと思います。」私は、新聞店にお伺いを立てた。「良かった。朝刊は、少し様子を見てから、判断しましょう。」私の意を察した様に、社長さんが考えてくれていた。「朝刊の時間は、人通りも少ないので、何かあっても分かりませんから……。」私は安堵し、「それでは、来週から、よろしく願います。」と電話を置いたのだった。

会場

兎にも角にも会場を予約する事にした。追い込まれなければ、動き出さない自分だった。会場は、大崎駅から程近い公共の美術館にした。早速、美術館へ足を運び、利用したい旨を申し出ると、「インターネット美術館へも応募して頂いてますね。」と好意的な反応が返って来た。「はい。マウスで書いた書の個展を企画しています。」と簡単に個展の内容を説明した。「申込書を書いて頂きますが、まず会場をご案内しましょう。」と展示スペースへ案内された。「商行為は、禁止です。それと、花は、ご遠慮下さい。・・・」スペースの広さを確認しながら、利用上の注意を聞いた。「分かりました。」「それと、搬入搬出、展示は、ご自分で行なって下さい。照明機材は、有りますので、必要な数をお使い下さい。」説明を聞きながら、必要な人員を確保する為の策を考え始めていた。大体の事を理解し、申込書を手にして、会場を後にする。インターネット美術館への出品が功を奏し、思いの外対応が良かった事に、安心したのだった。

埼京線を使えば、大崎、新宿は、目と鼻の先。父が、見に来るにも、便利だ。父の状態が、悪化しない中に、個展を開きたい。その事は、運を天に任せるしかないのだが、自分で出来る事を進めるしかないのだ。

家に戻り、壁面を埋めるだけの作品数を検討する。びっしりと埋めないにしても、かなりの数が必要だ。書道展に出品する時は、規定の大きさの作品を一点仕上げるだけだが、今回は違う。作品の大きさも、数も、書体も、書式も、何もかも自由なのだ。いざ、自由な環境を手に入れると、その自由さを持って余してしまうのだった。

それでも、作品の構成を考える事は、楽しい事であった。会場の中心には、扁額の漢字作品、その両脇は、額装の仮名作品、・・・。アイディアは浮かんでは、消えてゆく。そんな事を繰り返しながらも、徐々に、会場のイメージが固まって来た。「マウスで書道展」というキャッチではあるが、中心には、筆と墨と和紙での作品を据えよう、そう思う。そして、秘密裏に、父の梵字の刻字を賛助作品する事にした。

「こんにちは。」久しぶりの事務所だった。「大丈夫ですか？」色々な方から、声が掛かる。「どうにか大丈夫です。右と左の腎臓に石があって、右側の尿道が詰まって・・・」私は、その度に、症状を説明した。「ビールを飲んで、縄跳びをすると良いのよ！」色々な方が、それぞれの治療方法を披露してくれる。その治療法は、古くさいものもあったが、その気遣いが嬉しかった。

「朝刊配達は、一度中止にさせていただきますか？」私は、正式に社長さんに申し出た。「分かりました。そうしましょう。夕刊は、今迄通りお願いします。」「有難うございます。そうさせていただきます。」「夕刊配達を続けられる事が決定し、安堵した。仕事を増やす為に朝刊を始めたのに、体調が原因とは言え、両方の仕事を失う事は、避けたかった。徐々にではあるが、東京での仕事が激減した事が、表面化し始めていたのだった。

「今日は、2区分だけの配達で良いです。最後の1区は私が配ります。」店長さんが、そう言ってくれた。「有難うございます。」素直に、配達の一部をお願いする事にした。激痛は、無くなったものの、疼く様な痛みが完全には無くなっていない。果たして、無事に配達出来るのか、不安を感じない訳では無かった。

「行ってきます。」いつもの様に、夕刊をセットし、配達に向かう。暫く休んでいた事で、道順を忘れてはいないか心配だ。50を過ぎてから、自分の記憶力が、極端に衰えている事が、心配に輪を掛けていた。配達を始めたばかりの頃の様子に、1件1件を確かめながら、配達をする。徐々に、大丈夫、忘れていないと自信を回復し出す。数ヶ月続けた事は、頭ではなく、体にしみ込んでいるのだ。記憶が甦ると言うよりも、体が、配達のリズムを思い出し始めていた。

「只今戻りました。」無事に配達は、終了した。「お疲れ様でした。大丈夫ですか？」社長の奥さんだった。「ご迷惑をかけましたが、大丈夫です。」暫く、病状の話をして、事務所を後にした。

「只今。どうだった？」義母のお見舞いから、妻が帰って来た。「大丈夫だった。」「辛かったら、止めてもいいよ。」「うん。朝刊は、止めさせて貰った。」「良かったね。無理しなくても良いよ。何とかなる！」いつも前向きな妻だった。「今日は、店長が、少し配ってくれた。」「そう。」「道も忘れてなかった。」「そう。良かったね。」妻は、ホッと、微笑んだ。「頑張ろうね。」彼女の言葉が、嬉しかった。

単身パック

久しぶりに妻が東京へ戻って来た。名古屋で借りた家への引っ越しの準備の為だった。取り敢えず、彼女だけが先に名古屋での生活を始める事にしたのだった。妻は、新聞紙を引っ越し単身パックのサイズにして、床に貼っていた。その上に、生活に必要な物を置いて、荷物の準備を始めた。一人で暮らすには、十分な量を送る事の出来る単身パックではあるが、二人での生活で肥大化した荷物は、簡単には、規定のサイズには治まり切らない様だ。こうすれば入る、あっちが飛び出した、等と試行が繰り返されてた。端で見ている私には、立体パズルを楽しんでいるかの様に感じられる。当の本人は、引っ越し料金を抑える為に必死なのだが、その真剣さが面白かった。自分の関係しない今回の引っ越しは、気が楽だった。

私達夫婦には、引っ越しには、あまり良い思い出が無い。過去2回の引っ越しの度に、大きな喧嘩をした事が、その理由だ。決められた期日迄に、必ず部屋を明け渡さなければならない。そのプレシャーと、普段は目にもしない膨大な隠された荷物の多さに、二人とも冷静さを失うのだった。何故こんなに、荷物があるのだろうか。もう物を買うのは、止めよう。引っ越しの度に、そう決意するのだが、いつの間にか、荷物は増え続ける。しかも、その荷物の大半は、私の本であり、ソフトのパッケージであり、趣味の品々であった。いつもは不要と思われる物であっても、いざ捨てる段になると、躊躇される。そんな私の姿に、妻は、普段は表す事の無い、私への苛々が、爆発するのだ。妻のその苛々は、不利な立場の私を逆上させ、大きな喧嘩へと発展して行くのだった。

自分の荷物の無い今回は、冷静だった。アタフタした彼女の姿が、面白かったが、おくびにも出さず、「大変だね。少し休んだ方が、いい考えが浮かぶよ。」と彼女へ助言した。「うん。もう直ぐ終わるから。」荷物を規定のスペースに積み込む事だけしか頭に無い様だ。「今回が、最後の引っ越しじゃないんだから、必要な物だけで良いよ。」「そうだね。まあ、いいか。」諦めたのか彼女はそう言った後、更に、予想外の言葉を発したのだった。

体質

体の中の石は、別として、妻は、私が新聞配達を始めた事を喜んでいて。それは、経済的な理由も大きかったが、それよりも、私が健康になり始めたからだった。新聞配達を始める前の私は、頻繁に微熱を出し、何日も寝込む事が屢々だった。そんなこともあり、始めた頃は、いったいいつ迄続くのか不安を感じていたに違いない。しかし、彼女の不安をよそに、私は、今回の病気になる迄、休む事無く新聞配達を続けていた。

「石で休んだけど、丈夫になったね。」妻は、感慨深気に、そう漏らした。「うん。元気になったみたいだ。何か、この仕事が好きみたい。」私は、そう答えた。「良かったね。」彼女は、素直にそう思っているのだろう。仕事に慣れ始めると、直ぐに飽きる。自分がいなくても仕事が進むと思うと、会社に行く必要を感じなくなる。そんな私の性格を、彼女は十分に理解していた。

「1時間位バイクに乗って、外の空気が吸えるからかな？」私なりの理由を口にした。「休むと他の人に迷惑がかかるからじゃない。必要とされている時は、休まないもん。」彼女のその言葉に、そうかも知れないと思った。必要とされていないと感じ始めると、私の体は、不調を訴える事が常だった。新聞配達と言うデューティが、私の体調を保っているらしい。

「じゃあ、行って来るね。」「行ってらっしゃい。気を付けてね。」タオルとヘルメットを持って、いつもの言葉を交わして、配達へ向かう。「今日も、手伝おうか？」店長さんが、私に確認した。「もう大丈夫です。今日から、全部回ります。」昨日の配達で、自信は回復していた。夕刊の数を確認し、バッグに入れる。以前の状態に戻った事を実感する。「行ってきます。」バイクをキック。風を感じながら、出発する。いつもの角を曲がり、いつものポストに投函する。何もかも以前のままだ。焦る事無く、配達を続け、やがて配達は終了した。「前より丈夫になった。」そう呟きながら、暮れ始めた道を引き返す。バイクの音が、響いていた。

「車を買おう！」妻は、唐突に切り出した。「ええ。」私は、言葉に詰まった。「お母ちゃんも援助してくれるって！」「そう・・・」どうやら本気らしい。「名古屋に行ったら、絶対に必要だよ。」それはそうであろう、と私も思うが、今迄、車の無い暮らしをしていた私には、どこか分不相応な気がする。「駐車場は？」「近くにあるって、不動産屋さんが言っていた。」事は既に進んでいるらしい。「そうなんだ。」本気なんだ、と知ると、どんな車を買おうかと、心は弾み出した。

「軽にしようと思うの。税金も安いし、小さいから。」彼女は言った。「そうだね。」ペーパードライバーの私も、小さい方が、安心だった。買うと決まれば、じっとはしてられない。早速、近所のディーラへ行ってみる事にする。

「東京で車は買いますが、名古屋で使うので、ナンバーは名古屋で取りたいのですが、大丈夫でしょうか？」入ったディーラの担当者さんへ質問した。「はぁ・・・。」担当者さんは、車の質問では無い、突飛な質問が、瞬時には、理解出来ないようだった。事情を話すと質問の意図を理解してくれた。「少しお待ち下さい。今、確認してみます。」二人は、軽の自動車を眺めながら答えを待つ。車を買おうとも考えた事の無い二人は、車を選ぶ術を知らず、眺める事だけが、その唯一の方法だった。「大丈夫です。こちらで、手続き出来ますが、東京のナンバーも取れますよ。」「そうですか。」二人は、CMに流れている車を見ながら、価格を確認し、大体の予算を確認した。「分かりました。少し検討してみます。また、来ます。」と、知りたい事だけを確認して、店を後にした。担当者さんは、深く頭を下げ、二人を送り出しっていた。

「どう？」私は、確認する。「ううん。可愛く無い。」妻は、キッパリと言った。どうやら、彼女の観点は、性能では無く、可愛さと価格らしい。「じゃあ、明日にでも、他を回ってみよう。」「そうしようね。」彼女も同意した。「東京のナンバーも取れるって言ってたね。」私は、ナンバーの事が気になり出していた。「品川ナンバーにするか。」「後々面倒だよ。」彼女には、ナンバーの事はどうでも良い事らしい。買うのは、彼女だ。決定権の無い私は、単に付き添いでしかないのだった。

体調も回復し、夕刊配達が復帰すると朝刊への思いが燦り始めた。三日坊主。朝刊配達を断念した事が、中途半端に、やるべき事投げした様に思われてならない。体調だから仕方が無い。正当な理由は、見つかるのだが、気持ちは曇ったままだった。

後ろの荷台を跨ぐ様に乗り降りする、夕刊配達で身に付いた方法が、朝刊配達では障害になっている事に気付いていた。朝刊配達では、新聞を後ろの荷台に山積みするため、荷台を跨ぐ事が出来ない。朝刊では、荷台を避け、バイクの前から足を回す必要があった。私は、この姿勢の改善に手子摺り、何度も、足をハンドルに打つけ、未だに、青いアザが残っていた。

朝刊配達に復帰する予定は無いものの、私は、この乗り降りの方法を改善しようと思った。いつでも、朝刊に復帰出来る様に準備しておく事によって、自分の気持ちを前向きにしようと考えたのだった。

一度身に付いた癖は、なかなか修正出来ない。何度も、足をぶつけ、また、荷台を跨ごうとする自分に気付き、その度に、学習能力の欠如を嘆いた。

痛みの伴う訓練は、自分を修正するには効果的だった。次第に、足をぶつける回数も減っていった。そして、いつの間にか、自然と足が前の方から移動する様になっていった。頭だけではダメなのだ。体が覚え、無意識の中に動く様になって初めて、身に付いたと言えるのかもしれない。私の今迄の仕事は、どちらかと言えば、頭だけの作業で完結していた。その事が、体感する事の重要性を忘れさせてしまったのだ。

「この頃、あまり足を打つけなかったんだ。」私は、妻に自分の進化を自慢した。「凄いじゃん。」彼女も喜んでくれる。「何でも練習だね。」そう付け加えた。「毎日、少しだけでも進化する。歳を取っても、進化する。」私は、気を良くしていた。でも、こんな気持ちになったのは妻との生活が、もたらしたものだ。いつも前向きの彼女が、後ろ向きな性格の私を変えていったのだった。彼女は、鼻歌を歌いながら、食器を洗っていた。

妻と一緒に、再度、車を見に出かけた。二件目にも、彼女が納得出来るそれは、見つからなかった。「じゃあ、次に行くか。」私は、諦めて次のディーラへと向う事にした。大して興味無いと言っていたくせに、と思ったが、口に出す事は止めにした。ここで、機嫌を損ねると後々大変な事になる。そう予感した。

興味は無いが、いざ買うとなると、妥協しない。彼女の服を選んでいる時の事が浮かび、少し嫌気が差し始めて来たが、今回は、車と言う代物。いつもの様に、決まるまで、本を見ていると、逃げ出す事は躊躇われた。3つ目のディーラのドアを開けた。店員さんの愛想の良い声が掛かった。「軽を捜しています。納期は、出来るだけ早くで、ナンバーは名古屋でお願いしたいのですが。」妻は、慣れた様子で、必要な条件を提示した。「納期は決まった時点で、確認しますので、どうぞご覧になって下さい。」

二人は、車を選び始めた。2台目の車のドアに手をかけると、「カワイイ。このドアの丸い取手が、カワイイ。」そう口にした。「そう？」私には、理解出来ない。ドアを開け、シートに座ると、「ブレーキってどれだっけ？」と、驚くべき質問が飛んで来た。「そんなのも知らないの！」私は、呆気に取られた。「暫く乗ってないから忘れちゃった。」私は、バツが悪く、店員さんの顔を確認する。小心者だ。それに引き換え、妻は、そんな事は意にも介さず、店員さんに必要な事を確認していた。大物だ。

「これにしよう。」彼女の意は決まった様だ。「良いよ。」私は、同意する。「これにしようと思います。」彼女は、店員さんに、そう伝えた。「分かりました。色は、何にします。」カタログが、手渡される。私は、赤が良いかな、やはり黒かな、と思案し始めると彼女の一声が掛かった。「汚れが目立たない色が良いよ。これなんかどう？」と、ベージュが提示された。あんなにカワイイに拘っていたくせに！、この色か？と思ったが、オーナは彼女だ。「カーナビはあった方が良いでしょう。知らない土地だから。」私は、唯一の願いを訴えた。「ううん。」時間を置いて、「分かった。そうしよう。」と了承された。

納期等の最終確認が終わり、正式に契約が終わった。直ぐに店長さんが、挨拶に来られた。こんなに簡単に決まる事も少ないのだろうか、店員さんの顔は微笑んでいた。しかし、二人に取っては、ここまでに長い時間を費やしていたのだった。

「納車が待ち遠しいね。」私の言葉に、「私の引っ越しの日じゃん。直ぐだよ。それよりも、準備しなきゃ。」彼女は、現実にもう戻っていた。カワイイ。一体何だったのだろうか？私は、未だに、女心が理解出来ないのだった。

バイクを前側から乗降りする事に慣れて来ると、別の問題が見つかった。それは、スタンドを下ろす時だ。荷台を跨いで降りていた時には、跨いだついでに、右足でスタンドを下ろす事が出来たのだが、前から降りる様になると、その行為は不効率だった。バイクの止まる寸前に、左足で、スタンドを下ろす。その技を、習得する必要が出て来たのだった。

「あまりハンドルに足を打つけ無くなったよ。でも、・・・」私は、妻に自分の進化と新たな課題を報告した。「左足でスタンドを下ろすのね。知ってる。郵便屋さんがやってるもん。」彼女は、即座に私の課題を理解した。「あれが簡単そうで、なかなか難しい。未だ、左足の位置を目で確認しないと、ダメなんだ。見ない様にすると、空振りするし・・・」私は、状況を説明した。「そんなに焦らなくて大丈夫だよ。その中に、出来る様になるって！」期待通りの前向きな答えに、納得するのだった。

スタンドの事を意識し出すと、今迄出来ていた、前降りが、チグハグして来た。また、ハンドルに足を打つけたり、荷台を跨ごうとしたりの状態に後戻りし出した。夕刊しか配らないのだから、荷台を跨いでしまおうか、そんな誘惑に駆られる。「その中に、出来るようになるって！」妻の言葉が、浮かんだ。今更、後戻りしては意味が無い。そう思い直す。癖を直す事は、まさに矯正なのだ実感した。

ぎこちない状態も何日か過ぎると、慣れ始め、左足でスタンドを下ろし、前から降りる事が、無意識に出来る様になって来た。配達を始めたばかりの頃は、何もかも、無意識には出来なかった。その事を思い出す。「郵便屋さんみたいに、左足でスタンドを下ろせる様になって来たぜ。」妻へ、進歩を伝える。「良かったね。何だって、やれば出来る様になるよ！」微笑みながら妻は言った。「左足でスタンドを下ろせて、初めてプロだな。」調子に乗って私も続ける。「そうだね。」彼女は笑っていた。プロになったのか、良く分からない。それでも、何か一皮剥けた。そう実感するのだった。

妻の旅立ちの日は、東京は、春とは言え雪の気配だった。天気予報は、夜中からの雪を告げていた。単身引っ越しパックに乗り切らなかった荷物が、一人同居人の減る部屋に、置かれていた。私は、会社へ向かい、仕事をこなしながら、妻からの電話を待った。「車、今届いたよ。」昼過ぎに、彼女からの電話。納車の日、雪、高速、夜中、悪条件の運転が気になりだす。インターネットで、天気を確認すると、やはり夜からは、雪のままだった。私は、とっとと仕事を片付け、会社を早退した。

「只今。」「あれ？早かったね。」「雪になるかも知れないから、早く出よう。」私は、早退の理由を告げた。「分かった。じゃあ、残った荷物を積んどくね。」「運転どう？」「多分大丈夫。ライトの付け方も分かってる。」「そう。まあ、雪になる前に東京を出よう。」慌ただしく、出発の最終作業に取りかかった。

インターネットを検索し、仮眠出来る場所を探す。当初の予定では、昼前に名古屋の予定であったが、出発が早くなった為、どこかで仮眠する必要が出て来たのだった。温泉施設で仮眠出来る場所が、見つかった。予約の必要も無い。忙しなく荷物を運んでいる妻へ、「温泉で仮眠しよう。借りた家も側だから。」「うん。」彼女は、荷物を運ぶ手を休ませる事無く、頷いた。

私も荷物を持って部屋を出ると、お隣さんから声が掛かった。「引っ越しですか？」「はい。でも、引っ越すのは、取り敢えず妻だけです。」離婚ではない事を強調した。挨拶を交わすだけの関係ではあるが、やはり、寂寥感を感じる。それは、東京を離れる事へのものだったのかも知れない。

日の暮れる前に、準備は完了した。「じゃやそろそろ行くか。」カーナビを目的地にセットしながら、妻に確認した。「うん。行こう。」彼女は、ブレーキを下ろし、アクセルを踏んだ。見慣れた、大井埠頭の麒麟達もいつもと違って見える。車が、大森を抜ける頃に、夕暮れを迎えていた。「雪が降らないうちに、高速に乗れそうだね。」「うん。良かった。」慣れない運転に緊張しながら、彼女は答えた。都心の混雑を通り抜け、用賀インターに着いた。心配だった初めてのETCも無事通過し、二人は、名古屋への夜のドライブが始まったのだった。

体の中の石も、暴れだす事無く、日々は通常の状態に戻って行った。妻は、週3日のアルバイトと毎日の義母さんのお見舞い。私は、夕刊配達。グループホームの義母さんの状態も安定していた。夕刊配達だけになった私には、年末年始は、久しぶりの連続した休みだった。

とはいえ、義母さんへのお見舞いを欠かす訳にはいかない。顔を見せる事が、妻の気持ちの張りであり、義母さん自身の唯一の楽しみだった。元旦は、義母、妻、私の3人で、ホテルで食事をする事が恒例になっていた。元旦から営業している店は、豊田付近では、ホテルだけだった。その為、ホテルでの食事が、いつの間にか恒例となっていた。

ステーキハウスで、昼食。普段とは違う、洒落た店に義母は戸惑いを見せていた。車いすから、降り、テーブルに付く。体は、痩せ細っていた。少し前迄は、大食だった義母も、その食は、細くなり始めていた。そして、良く笑う義母の笑いが少なくなっていた。私は、休日の習いに従い、昼間からビールとワインを頼み、段々と饒舌になる。時が経つにつれ、義母も楽しそうに食事を楽しんでいた。私ができる事は、こんな事位しか出来ない。たまに、顔を見せる。そんな事しか出来ないのだった。

義母をグループホーム迄送り、妻と二人で、帰路に着く。私は、不意に東京に行こうと思った。「これから、叔母ちゃんの家に行こうか?」「ええ、これから?」妻は、突然の提案に躊躇した。「電話してみる。多分大丈夫だと思う。高速で行けば、安いし、明日帰ってくれば良い。」「いつも突然なんだから!」そんな言葉には反応せずに、叔母へメールを入れる。間もなく、了解のメールが届いた。「大丈夫だって。」「分かった。じゃあ行こう。中央高速の方が、便利だけど、雪大丈夫かな?」「まあ、大丈夫じゃない。」私は、何の根拠も無く、そう答える。「この天気なら大丈夫かも。」彼女も単純だ。

家に戻り、大急ぎで支度をして、中央高速へ向かう。久しぶりの東京。とは言っても、叔母の家は、埼玉。八王子を通過して叔母の所へ向かう。正確には東京ではなく、埼玉だが、気分は、久しぶりの東京だった。

雪は、積もらずにいてくれたが、所々で雪が降り、何台かの除雪剤を撒く車に出会った。妻と二人で、バカな話をしながら車を駆る。車は、夜中を迎える前に目的地に到着した。

心配した雪の影響も無く名古屋へ入った。既に夜中だ。東名三好インターで、高速を後にする。そこは、暗闇だった。「暗いな。」私は、思わずそう漏らす。「本当に暗いね。」東京の明るさが、当然の二人には、そこは正に、暗闇だった。所々に街灯はある。しかし、二人の目には、その明るさが感じられない。「東京は、異常に明るいんだな。」夜中でも、明るい街。それは、ここにはもう無い。

「道大丈夫？」運転する妻に確認する。「分からないよ。でも、カーナビがあるから大丈夫。」弱々しい返事が返って来た。見知らぬ道の上に、この闇。二人には、ナビだけが、頼りなのだった。暫くすると、国道に出た。街灯は増えたものの、依然、不安を消す程には明るくは無い。「カーナビあって良かっただろう。」私は、自分の手柄を讃えた。「そうだね。」不安を抱えながら運転している彼女は、鬱陶しそうに答えた。

ナビに従い、漸く目的地の温泉施設が見えて来た。そこだけが、暗闇の中で明るく、怪し気な雰囲気だ。「大丈夫かな？」私は不安になった。「でも、ここしか無いよ。」彼女は、腹を括っていた。受付を済ませ、風呂で汗を流す。夜中のせい、客は疎らだ。その中、数人が、ソファで仮眠をして事に気が付いた。「仮眠出来るって、書いてあったけど、ソファで寝ても良いと言う事かな？」不安げに彼女に意見を求めた。「そうかもしれないね。他に場所も無さそうだし。」彼女も同意する。「仕方ない。寝るか。」私は、ソファに、腰を下ろし、目を瞑った。

ウトウトしていると、微笑みながら、彼女は、私の肩を揺すった。「あっちにベッドがあるよ。」移動しベッドに寝て驚いた。「マッサージ用じゃないか。ボールがあたって痛い。」「でも、横になれるから、ソファよりも良いでしょう。」彼女は、そう言いながら、自分のベッドに横たわっていた。「まあ、良いか。もう直ぐ、朝だし。」私も諦め、夫々のベッドで、眠りについたのであった。

目が覚めると、「仮眠室が、2階にあった。」彼女は悔しそうにそう言った。「えっ。あったんだ。変だと思った。」私は、ドジな二人の姿が可笑しかった。冷静になれば、仮眠室があつて当然だと思う。「どうする？」私の質問に、「1時間だけ寝よう。」と彼女は目を擦った。二人は、笑いを堪えながら、仮眠室へ潜り込んだ。夜はもう明けようとしていた。

叔父と叔母に新年の挨拶をする。「早稲田には行かなくていいの？」叔母が、私に確認した。私の実家に、顔を出さなくても良いのか、と言う確認だった。「良いよ。明日のお昼前には、帰らないと。」私は、答える。「そう。なら良いけど。」母と私の折り合いが良く無い事を理解している彼女は、あっさり了承した。そんな所が、父の家系の特徴だった。必要以上に、常識を強要される事が無い事が、私には救いだった。

「いつも突然来て。まあ、慣れているから良いけど。」彼女がそう言ったのは、私に愚痴と言うよりも、妻への気遣いなのだろう。気を使わずに、いつ来ても良いのよ。と言う事だ。「すみませんね。本当に。」妻は、その場を繕った。「明日は、皆来るって。」明日は、従兄妹とその子供達に来る事が伝えられた。従兄妹とは言え、小さな頃から交流のある二人は、私にとって兄妹のような存在だった。少し離れた距離感の為か、実の兄妹よりも、親しい関係なのだった。

「そう。良かった。」と私は答え、叔父にビールを注いだ。「お父さんは、もういいから。」叔母から、予想通りのご注意が告げられた。叔父も妻も私も、そんな事は、お見通し。互いに、ビールを酌み交わす。私達夫婦が来た事で、叔父は飲む権利を得たのだった。

「もっとゆっくり出来れば良いのにね。」叔母の言葉に、「母のお見舞いがあるので、すみません。」と妻は言う。もう何度そう言ったのだろう。その度に、肩身の狭い思いをしているに違いない。それでも、持ち前の明るさで、皆を笑わせていた。「何にも無いけど、ジャンジャン飲んでね。」叔母のその言葉で、「ワインあります。」と妻は、確認する。「冷蔵庫にあるから、勝手に飲んで。」勝手知ったる他人の冷蔵庫。「はい。」と、妻は冷蔵庫に向かった。

「布団敷いて置いたから、適当に寝てね。ソファで寝ても良いけど。」酔うとソファで寝るのが、私の常だ。叔母の家のソファで、何度寝てしまった事か知れない。長旅の疲れか、ほろ酔いの為か、睡魔が訪れる。気が付くと、叔父は、既に床に付いていた。「先に寝るね。」私は、布団に潜り込んだ。叔母と妻は、女同士の会話を楽しみながら、夜は更けて行くのだった。

駐車場

「そろそろ行くか？」仮眠から覚めた私は、妻に言った。「少し早いけど、ここにいてももしかないから、行きますか。」彼女もこの温泉施設には、未練が無いらしい。「道分かる？」「赤池駅まで出れば、分かると思う。」彼女も、この場所が、どこなのか正確には分からないのだった。「カーナビがあるから、大丈夫か。」ナビに頼り切っている自分が不思議だった。以前なら前もって地図を準備していたに違いない。それ程の年寄りではないが、時代は進んでいるのだと思う。

ナビに、目的地をセットして、出発した。混雑した道路から、既に通勤時間が始まっている事に気が付いたのだった。ナビだけが頼りの二人の車は、他の車とは流れが違う。初めての道は、ナビの示している曲がり角と、今日にしている角が、合っているのか、二人には判断がつかないのだった。ビービーと、クラクションが鳴った。「こんな細い道だけど？」妻は、不安を私に渡した。「もう、曲がるしか無いだろう。」後ろの車から急かされている状況を回避するしか無いと私は判断した。「分かった。」彼女も覚悟を決め、細い道に突入して行った。「それにしても細いな。対向車が来ない事を祈るしか無いな。」私の言葉に、彼女は、反応する余裕も無く、ハンドルを握り締めている。車は、幸いにも対向車に遭遇する事も無く、細い道を抜けた。

「分かった。ここからは、分かる。」妻は、歓喜の声を上げ、「もう直ぐ。」と続けた。その言葉の通り、迷う事無く借りている駐車場に到着した。安堵した途端、彼女から意外な一言が発せられた。「駐車場は、ここだけど、どこに止めるのか分からない。」「えっ！」何で、そんな馬鹿な事が起るのだ。「だって、場所の記号が消えかかっているどこだか分からない。」言われてみれば、どこの場所も記号が薄くなって判断出来る状態ではないのだった。「駐車場の不動産屋さんに電話してみれば。」不機嫌そうに私は、言った。「もうやってるかな？」確かに、事務所の開いている時間には早過ぎる。「でも、それしか方法は無いじゃないか。」当たり先は妻しか見つからない。「電話してみるね。」仕方なしに彼女は、電話をした。

「やっぱり出ない。」「仕方ないな。どうする？」と善後策を思案していると、見知らぬ小父さんから声をかけられた。「東京から今日引っ越ししてきました・・・」と説明すると、小父さんは、流暢な名古屋弁で答えを返してくれた。私には、何の事やら分からない。「有難うございます・・・」と名古屋生まれの妻がお礼を述べた。「何だって？」「ううん。私にも、あまりにもネイティブな名古屋弁で良く分からないのだけど、寒いから、小父さんの車の中で待てば、と言ってくれたみたい。」「ふうん。親切だな。」有り難い申し出ではあったが、車はあるのだった。無いのは、それを止める場所だった。「仕方ないね。車の中で、電話の繋がるまで待とうよ。」「そうだな。」

暫くして、場所の確認がとれ、車を指定の場所に移動した。しかし、借りた家には、未だ入れない。今度は、家の不動産屋さんの開くのを待つ事になった。「お腹空いたね。」「車は止められたから、何か食べに行こう。どこかあるの？」「分からない。駅の方に行ってみよう。」二人は、見知らぬ土地で、食料を求めて彷徨い始めたのだった。

とんぼ返り

朝になると従兄妹とその一家が、次々とやって来た。新年の挨拶と共にお年玉を渡す。子供のいない二人には、お年玉と言う習慣は不公平な物だ。出て行くだけの一方通行だ。子供達の喜ぶ顔よりも、従兄妹達の顔の方が、より微笑んでいる様に見える。とは言え、その中身とは無関係に、お年玉を喜ぶ幼い子供達の顔が嬉しい。

顔を合わせた瞬間は、警戒していた子供達も、暫くすると、それを解いて来る。子供なりに、その人との接し方を判断してから行動に出るのだろう。警戒心から解放されると、徐々に行動がエスカレートして行く事が、面白い。叱られるまでは、どんどん行動が過激になって行く。要求を受け入れるだけでは、子供は直ぐに飽きる様だ。適度に意地悪をして見ると、それに対応して来る。知恵を絞って遊んでいるのだ。

子供との遊びに付合う事は、疲れる物だ。底の無い体力について行く事が出来ない。行きも絶え絶えになった頃、従弟から声が掛かった。「お兄ちゃんも、飲みなよ。」ビールが注がれ、漸く一息ついた。「アイツには、飲ませないで！運転があるから！」私は、皆に注意を促す事を忘れた。妻は、分かっているわよと言う顔をしていた。飲む席では、彼女が運転する。それが、暗黙の了解事項なのだ。

「何にも無いけど、食べてね。」叔母が、料理を運んだついでに言った。いつもの事だ。好き嫌いの激しい私は、食べられる物が極端に限られる。私は、その言葉で、解放される。『あなたは、食べられる物を、勝手に種なさい。勧めるの面倒だから！』との宣言なのだ。これで、気遣いされる事無く自由に、飲める。

酔う程に、普段は無口な叔父も饒舌に変わる。「もう飲まなくていいよ。」従兄妹達が、口を揃えて注意をするが、酔っている人には効果はなかった。亡父と私の関係は、こんなにも近い物ではなかった。父は、絶対であり、おいそれと口をきける対象ではなかった。否、面倒だから、出来る限り距離を置いていたと言う事なのかも知れない。

「中央高速大丈夫かな？」そろそろ帰る時間が近づいて来た。「いつ雪が降るかも知れないから、東名の方が安全だけど・・・」「来る時は大丈夫だったし、まだ早いから大丈夫かな？」皆意見は言うが、結論は出ない。「まあ、中央で帰るか。」そう切り出して、叔母の家を退散した。今生の別ではないが、いつも帰る瞬間は、物悲しい。名古屋と言う距離の為か、以前よりも、その思いが強くなったのかも知れない。

「広いな。」名古屋の家を開けるなり、私は、言った。FAXで、間取りは確認していたものの、実際に、目にしたのは、それが始めてだった。「まだ、何も荷物が無いからだよ。」妻は、そう答える。「それもそうだな。始めは広い家も、直ぐに狭くなる。今度は、 unnecessaryなものは、買わない様にしよう。」引っ越しをする度に、そう誓うのだが、それもいつのまにか忘れ去り、家の中は、荷物で埋まる事が常だ。「東京の家もいずれ引き払わなきゃいけないんだから、必要最低限にしておく。」彼女も、その事は、重々承知と言う風だ。

軽に積んだ荷物は、些細な物だった。部屋の中への移動も、予想以上に簡単に終わる。そのうち届く、単身パックの荷物が来ても、まだまだ、余裕がある。問題は、その状況が、いつまで保てるのかだ。

「叔母さん達、何時頃来るの？」引っ越しの手伝いに、叔母さん達が、来てくれるのだった。「もう直ぐだと思うけど。」「引っ越しは、もう終わったから、見て貰うだけだな。」「うん。」部屋の掃除をしながら、彼女は答えた。私は、何もする事も無く、手持ち無沙汰だ。「お昼どこに行こうか？どこか知ってるの？」私の興味は、もう、食べる事だけだった。「一カ所だけ知っている。不動産屋さんに教えてもらった、お寿司屋さんで良い？割と美味しかった。」「うん。知らないから、どこでも良いよ。」そう言いながら、私は、まだ見てもいないメニューを想像し始めた。「茶碗蒸しを頼んで、始めはビール。後は、魚だから、日本酒が良い。」頭の中は、昼食のシミュレーションで忙しい。「早く来ないかなあ。」私は、思わず漏らした。「本当に、食べる事ばかり！」彼女は、半ば呆れている。「男は、一食に命を懸けないと行けない。そう、誰かが言っていた。」私は、自分の正当性を主張したが、彼女は無反応だ。

彼女の携帯に、到着の電話が掛かった。「迎えにいつて来る。」私は、そういい、自転車で飛び出す。形通りの挨拶をして、早々に、寿司屋へ向かった。

予定通り、茶碗蒸しを頼み、ビールで喉を潤す。シミュレーション通りだ。マグロの刺身を、口に入れた時に、何か、いつもと違う事に気が付いた。「何か変だな。」私は、妻に確認した。「溜まり醤油だからかも。」そうだ、醤油が違うのだった。味噌が違う事は、妻の使う赤味噌で理解していたのだが、醤油は、東京の醤油の生活だった。「普通の醤油あるかな？」「聞いてみるね。」妻が、店員さんに確認する。「キッコウマンですか？」どうやら、キッコウマンと呼んでいるらしい。アメリカの様だ。暫くすると、いつもの醤油が、運ばれて来た。「やはり、刺身は、これじゃないと。」引っ越し初日に、文化の違いを感じるのだった。

年始の休日も終わり、夕刊配達が始まった。長い休みは、初めてだった。道順を忘れていないか、心配になる。寄る年波のせい、自分の記憶力に自身が無かった。「忘れてないか心配だね。」夕刊配達の先輩も、同様らしい。いつもよりも、慎重に部数を確認し、バイクをキックした。冬の寒さの為か、長い休みの為か、エンジンは、音を立てては、プスンとエンストした。何度もキックを繰り返す中に、体は熱くなり、配達前から、汗ばんでいた。

配達を始めれば、心配を他所に、順調に配達する事が出来た。夕刊配達を始めてから、半年。頭が覚えていると言うよりも、体が覚えていると言う感じだ。まだ、休みも明け切らないのか、車の量も少なく、気持ち良くバイクを駆る。休み気分も徐々に抜けて行く様だった。家の中に籠っているよりも、この生活の方が爽快だ。配達をしながら、気持ちも体も、徐々に平常へと回復し始めたのだった。

「ただいま戻りました。」事務所のドアを開け、いつもの挨拶をした。「お疲れ様。」いつもの返事が、返って来た。「朝刊もどうかな？」店長さんから、突然の打診だった。「やってくると助かるんだけど。」彼は続けて言った。「まだ、石が心配なんです。少し様子を見てから、返事させて下さい。」症状は、治まっているとは言え、突如襲われるかも知れない、石の恐怖が、まだ、即答する事を躊躇させたのだった。

「朝刊もやってほしいって。」私は、ドアを開けるなり、妻に伝えた。「体大丈夫？」彼女は返した。「それが心配なんだ……。結論は、少し待って貰ったけど。」「無理する事無いよ。」彼女も積極的には、再開を望んではいない様だ。「一週間様子を見てみるか。それで、痛みが出ない様だったら、また、始める。」「そうしましょう。」彼女は、おどけながら同意した。

痛みも再発せずに、一週間が過ぎていった。決断の時は来た。私は、夕刊配達を終えて、店長さんに伝えた。「朝刊やらせて頂けますか？」「良かった。」店長さんもホッとした様だ。「いつから始めます。」「都合のいい時からで良いです。」私は、少し迷いながら、「それならば、来週から、お願いします。」と伝えた。不安を感じながらも、朝刊配達が、再開したのだった。

妻の名古屋住まいから、義母さんの状態は落ち着いて来た様に感じていた。以前よりも、苛立つ事も少なくなり、豊田の義母の団地から、我が家まで、原付に跨がってやって来ては、等の住人からは、放擲された庭の草を引いてくれた。それは、彼女の存在意義を、私達に訴える唯一の術だったのかも知れない。

妻も時間を見つけては、義母の団地を訪れ、手紙や書類の整理しながら、話し相手になっていた。或る日、妻は、コートの取れかかったボタンが、義母の部屋に落ちた事に気が付かず帰宅した。

その晩は、二人して東京に行く予定だった。夜中に出れば、東京には朝に着く。二人は、夜中になるまで、仮眠していた。先に目の覚めた私は、まだ夢の中の妻を揺すった。「そろそろ、起きて！」私は、寝起きの悪い彼女に釘を刺した。「うん。もう起きる。」妻の当てにはならない返事だ。もう少し寝かしておくか、と思った瞬間、「ピンポン」と、我が家のチャイムが鳴った。「起きて！誰か来たみたい。」彼女を強く揺すった。「えっ！間違いじゃない？」彼女の答えを否定するかの様に、二度目のチャイムが鳴った。

「放って置くか？」と、私が言った途端、「お母ちゃんかも知れない！」と、彼女は飛び起きた。

「お母ちゃん、どうしたの？・・・」妻の義母とのやり取りが、部分的に届いて来る。「ごめんね。これから、東京に行かなければならないの。明日の夕方には、お母ちゃんの所に行くから。」彼女は、義母との会話を終えて、部屋に戻った。彼女の手の中には、落としたボタンが、握り締められていた。

「ボタンが無いと、困るだろうって、持って来てくれたみたい。」彼女は、誰に伝えるとも無く、呟いた。私は、返事が出てこない。「急がなくてもいいのにね。」彼女は、涙をこらえ笑顔を浮かべようとしているのだった。

「心配で仕方ないんだな。」私の言葉に、彼女は、柔らかく否定した。「それもあるけど・・・、きっと、何か役に立っているって言う実感が欲しいんだよ。きっと。」二人は、後ろ髪を引かれる思いで、名古屋を後にしたのだった。

空回りは光の中で

「昼間のうちに、空回りしたいのですが。」私は、店長さんに申し出た。真っ暗闇の中、順路を知らずに付いて回る事は、効率的でない事を、断念した朝刊配達の経験から感じていた。「その方が、良いですね。」店長さんも同意した。「一度、先導して下さい。後は、順路帳があれば一人で練習出来ます。」「じゃあ。明日の昼間に一緒に回しましょう。」初めの空回りの日時が決定した。

店長さんのバイクに付いて、周り始める。以前の朝刊配達の担当地域と違い、何度も通った事のある駅の近辺が、新たな担当地域だった。その為か、或いは昼間の為か、付いて回る事が、以前よりも楽に感じられた。同行しながら、道順だけでなく、ポストの場所や、細かな注意事項を確認する。犬が苦手な私にとって、犬の存在と、その気性を確認しておく事は、特に重要だった。

順調に、初めての空回りが、終了した。「大丈夫ですか？」店長さんの質問に、「順路帳があれば大丈夫です。」と答えた。半年の夕刊と短期間の朝刊配達の経験から生まれた自信から、そんな言葉が出たのだった。「明日から、道順を覚えるまで、一人で練習します。」私は、自身の計画を伝え、それは、了承された。

「どうだった？」妻が、私に初日の感想を確認する。「大丈夫だと思う。場所も、知っている駅の周りが殆どだった。」私は、自信の程を仄めかし、「明日からは、一人で空回りする。」と伝えた。

空回りは、順調に、『道順を覚える。』、『ポストの場所を覚える。』、『バイクの駐車場所を決める。』、『入れる新聞の種類を覚える。』の段階を進んで行った。もうそろそろ、実戦だと思い始めた頃、社長さんから、「どうですか？」と声をかけられた。

「もう、多分大丈夫だと思います。」私の答えに、「暗さで道の感じも変わりますから、そろそろ本番で！」と、勧められたのだった。私の多分という答えの理由も、その暗さへの不安からだ。暗さが、いつもの視界を別の物にする事を、以前の経験から知っていた。「分かりました。少しの間だけ、店長さんと一緒に回らせて下さい。」「分かりました。」いよいよ、朝刊配達の本番へ突入したのだった。

「思ったよりも早く着きそうだね。」車が、首都高に入った頃、夜は明け始めた。「お腹空いたね。早過ぎるから、どこかで、朝ご飯を食べよう。」妻は、ハンドルを握りながら言った。「家で食べればいいよ。何かあるから。」私の提案に、「そう言う訳にはいかないの！」と、彼女は、キッパリと反応した。嫁と言うのは、そう言うものなのかも知れない。「分かった。高速を降りたら、ファミレスで食べよう。」車は、早稲田のインターを降りた。

ファミレスに入り、朝食を注文する。「義母さん、大丈夫だったかな？」一段落した事が、昨夜の出来事を呼び覚ます。「大丈夫よ。来れたんだから、帰れるわ。」冷静な声が、返って来た。自分の身内には、冷静に、発言出来るのかも知れない。私の心配は、どこか形式的な気がする。それでも、何か気を使わなければいけない様に思う。「前来た時、道に迷って凄く時間がかかったよね・・・」ポツリと私は呟く。「それから、何度も来ているから、今は大丈夫。」キッパリと彼女は断言した。「ならいいけど・・・」これ以上の確認は無用の様だった。

朝食を済ませ、実家に着いた。「早くから、すみません。」彼女は、母に挨拶をしていた。「おはよう。」私は、必要最低限の挨拶を不機嫌そうに告げる。「朝ご飯食べたの？」母は、言った。「食べて来た。」私が、素っ気なく答えると、「すみません。お腹がペコペコだったので、ファミレスで食べて来ました。」と、彼女が丁寧に言い直した。「家で食べれば良いのに。」母から出た言葉は、予想通りだ。だから、家で食べれば良いのに、と思うが、それが、姑と嫁の関係なのだろう。

「少し休んだら、お父さんのお見舞いに行こう。」私は、二人の会話を割った。「うん。」彼女も頷いた。「じゃあ、言って来る。」私は、そう切り出し、二人は病院に向かった。「お見舞い、何にしようか？」「カステラが良いよ。好きだったお店知ってるよね。」「分かってる。そうする。」途中のデパートに寄り、それを携え、病室を尋ねた。父は、眠っていた。そして、その寝顔は、安らかなものではなかった。

「手紙を書いて帰ろう。」私は、そう言いながら、紙とペンを彼女に渡した。彼女は、手紙を書き、それをカステラに添えて、病室を後にした。

「何か苦しそうだったね。」彼女が先に口を開いた。「うん。」相槌を打つ事しか出来なかった。ただただ、その寝顔が去来するのだった。

階段の怪談

店長さんに付いて、本番の朝刊配達が始まった。道順は、既に頭の中にある為か、すんなりと後を追うことが出来た。意外と順調に初日の配達は終了した。「明日は、私が、休みなので、女性の方をお願いしておきます。」明日も、同行して貰える事で、ホッとする。

「おはよう御座います。」事務所のドアを開け挨拶をすると、同行してくれる先輩の女性から、「道順は分かります？」との質問。「はい。」と答えると、「じゃあ、前を走って下さい。私が、後から確認しながら付いて行きます。」私が、先導する事が決まった。時間は、かかったものの、配達は無事に終了した。「もう、大丈夫ですね。」彼女の一声で、翌朝から一人で配達する事が、簡単に決まった。もう、遣るしか無い。いつかは、一人で配らなければならない。それが、明日になっただけだ、と無理矢理得心した。

その日の夕刊配達に向かうと、「夏に夕刊配達を始めて、今度は、冬から朝刊配達！。寒い時期から、始めなくても良いのに！」先輩の女性が、微笑みながら声をかけてくれた。私は、苦笑した。それよりも、冬の朝刊配達の問題は、寒さでは無く、暗さの方なのだ。寒さを感じるのは、始めだけで、新聞を配り出す頃には、体は暖かくなる。しかし、闇の暗さは、配達が終わるまで明るくはならず、その終わる事に、漸く朝日が上がるのだった。

二、三日経つと、それにも慣れ始め、闇の中でも、迷わずにポストへ新聞を潜り込ませる事が出来るようになった。しかし、一つだけ例外があった。

灯の無い階段のある家が、それであった。始めに、一段あり、それを左に曲がって、少し進み、その後に、七段の階段がある。明るければ、なんでもない場所なのだが、灯の無い中では、難所だ。私は、躓かない様に、摺り足で歩き、段差の始まりを確認する。そして、階段の段数を、数えながら進むのだが、必ずと言っていい程、最後の段で、躓くのだった。数えているのに何故。階段の数が急に変わる。答えは、それしか浮かばない無いのだった。

治療の影響か元気の無い父ではあったが、週末には、家に戻って来ていた。父には、未だ、やり残している事が頭の中にあったのだと思う。それは、実家の土地の問題だった。

我が家の土地は、借地であった。その土地の権利を持っている方は、どうやら戦時中に行方不明になったらしい。その方は、不幸な事に、戦後も行方が知れなかった。そして、戦後の混乱の中、土地の権利者の代表の方から、土地をお借りしていた。しかし、その方も無くなり、地代を払う先が無くなった。結果、裁判所に供託金として地代を収めていたのだった。

権利者の代表の方の生前にも、この土地の権利を得るべく、動いたらしいのだが、土地の権利が、複雑で、一本化する事が、出来ずにいたらしい。土地だけは、自分の生前に、綺麗にしておきたい。それが父の思いだった。その思いから、父は入院前に、弁護士さんに、土地の購入を依頼していた事を、父の外泊の日に、始めて知った。

「これから、弁護士さんの所へ行くから、お前も、一緒に来なさい。」父は、私に言った。長男である私の義務らしい。父と二人、タクシーに乗り込み、弁護士さんの事務所に向かった。「これが、長男です。」父は、私を弁護士さんへ紹介した。自分の身に何かあったら、長男へ引き継ぎます、という事なのだろう。私は、弁護士さんへ挨拶をし、土地の状況を聞いた。もう直ぐ、決着は着くらしい。後は、条件の交渉と言う事であった。

父と私は、再び、タクシーに乗り込み、家へと向かった。短時間の移動ではあったが、特に話す事もなく、異様に長い時間を感じられた。父は、痛みを堪えながら、目を瞑り何かを考えている様だ。既に、死を覚悟している。そんな風だ。私も、無言で、近く現実になるであろう、父の死の事を考えずには、いられなかった。いずれは、訪れる事ではあるが、それが、予感出来る時期になっていたのだった。

夏バテが酷く起きているのが辛い日々が続いています。何よりも、蒸し暑さに降参です。と言っても、寝込む程ではなく、ゴロリとしていないと辛い。そんな中途半端な感じです。

そんなこともあり、急遽、「独り言」という小説とは無関係な章を作る事にし、小説をひねり出せない時の逃げ道としました。なるべく、この章が増えない様に、自ら願っています。

アッと思った瞬間に、バイクから体が投げ出されました。不思議な事に体の痛みよりも先に、夕刊が無事かが気になります。バックにセットされた夕刊に問題が無い事を知ると、痛みが出始めました。

気が付くと、道の先で白い車が、私のバイクの行方を待っている事に気が付きました。瞬間私は、バイクを押して、道を空ける場所を見つけ、押して移動しました。「すみません。」私の謝罪に、「気を付けなよ。私も新聞配達をしていたから、その気持ちが分かるわ！」と慰められました。「有難うございます。」「気を付けてね。」その小母さんは、優しい声を掛けて車を走らせました。

いつもよりも遅い帰りに、店長も心配していた様です。顔を見るなり、「大丈夫？」と声が掛かりました。「転けてしまいました。」「気を付けてね。遅いから、何かあったと思った。」お見通しです。

家に帰って、シャワーを浴びようとする、左足、右手は、青、赤、黒アザと、擦傷だらけ。シャワーが、掛かると飛び上がる程。汗だけを流して、ベッドで横たわっていました。そこへ妻が帰宅。「どうしたの？」あまりの痛々しい体に驚きましたが、痛みは、それ程でもありません。「転けた。」私は、一言照れくさそうに言いました。「気を付けてね。」

アザは未だに消えません。「気を付けて！」神様からの警告の様です。

まだまだ、暑い日が続いていますが、体が季節の変わり目を伝えています。朝起きてから、クシャミが続き始めたのです。もともとのアレルギーの為なのか分かりませんが、少しの気温の変化に、私の体は、対応出来ない様です。それは、季節の変わり目だけでなく、映画館、銀行等、冷房の利いた場所でも起ります。突然クシャミが出だし、20分位、止まりません。お酒を飲み過ぎた時も同様に、クシャミが続きだすとリミットの様です。それを越えると、俄然メートルは、上がるのですが、宿酔いが確定します。

そんな体は、季節の変わり目には、朝のクシャミだけでなく、不定期な微熱に悩まされます。体がだるいと感じると、決まって微熱があります。寝込む程ではないのですが、冴えない状態なのです。見た目には、それ程調子が悪そうには見えません。知らない人から見れば、怠け者です。

それでも、そんな変化に妻は必ず反応します。直ぐに頭に手を当てて、「熱があるでしょう。」と言い当てます。長年の付き合いの賜物でしょうか？それとも、彼女の本来の優しさなのでしょうか？

子供がいない二人は、夫婦ではあっても、家族ではありません。二人の関係は、夫婦以上家族未満。そんな微妙な感じなのかも知れません。

体が、秋に適応するまで、もう少し時間がかかりそうです。窓の外は、久しぶりの強い雨。雨音が、その激しさを伝えています。

最終章の構想 2010/10/14

思いつくままに書き始め、いつの間にか、止め時を失ってしまった様な気がします。もう少し、伝えたかった物を凝縮する予定でしたが、漫然とした物になってしまいました。来週から、最終章にします。今、その構想に悩んでいます。